

# 調査研究報告

第 1 号

目 次

県内主要古墳の調査(Ⅰ)……………学 芸 課 1	
行田市高山古墳, 白山古墳	
及び花園町黒田古墳群の測量調査	
県指定「農夫埴輪」について……………杉 崎 茂 樹 23	
將軍山古墳出土遺物の資料調査報告(Ⅰ)……………田 中 正 夫 28	
—鉄鏃—	
入間川の水神信仰……………柳 正 博 33	

さきたま資料館図書

埼玉県立さきたま資料館

昭和 63 年 3 月

## 創刊にあたって

さきたま資料館は、本年度で開館19年を閲したことになる。昭和43年にさきたま風土記の丘整備事業が開始されてから、丁度20年の年月が経過したわけである。

開館の当初、館長以下8人の小人数で出発したさきたま資料館の陣容も、現在では、館長・副館長・庶務課職員・学芸課職員（学芸員）等計11人を擁する組織に成長した。

この間、風土記の丘整備事業はいちぢるしく進展し、展示資料として収集した考古・民俗資料も大いに増加した。19年間に、さきたま資料館は、設立の方針を忠実に実行して、地域に根ざした資料館として確実に成長してきた、と行ってさしつかえないだろう。

それにしても、さきたま資料館に期待する県民の要望は、年々高まってきている。昭和53年に、稲荷山古墳から出土した鉄剣から115文字の銘文が検出されて以来、さきたま資料館を訪れる入館者は飛躍的に増加して、昨年には、開館以来の入館者が、実に250万人に達したのである。このような入館者の増加は、いうまでもなく、さきたま風土記の丘とさきたま資料館が、県内外の多くの人たちに知られ、さきたま資料館への興味と関心が急速に高まった、具体的な証しと考えていいだろう。

さきたま資料館は、このような多くの人々の期待に応える責務を負っている。埼玉古墳群の整備事業を一層充実して、わが国の代表的な大形古墳群—埼玉古墳群に相応しいさきたま風土記の丘を創造していかなければならないし、国宝「金錯銘鉄剣」や、国指定重要有形民俗文化財「北武蔵の農具」を中核とする展示事業を、更に充足していかなければならないのである。そして何よりも、期待されるさきたま資料館の運営の担い手として、職員一人一人が、研修に努めなければならないだろう。

本年度はじめて刊行した「調査研究報告」は、学芸課職員の、さきたま資料館の学芸員としての自覚の所産であった。本年度は特に増加した各種の国庫補助事業—丸墓山古墳の保存修理事業・歴史の道調査事業などのほかに、急に立案された特別展—はにわ人の世界も加わって、学芸課はその遂行に忙殺され、「調査研究報告」の執筆に参加できたものは、杉崎・柳・田中の三学芸員に限られたが、研究をとおして県民に奉仕する学芸課の理念は、一歩具体化できたように思う。今後、これを出発点にして、2号、3号と「調査研究報告」の発刊を続けていけば、さきたま資料館の学芸活動の伝統が築かれていくはずである。

最後に、さきたま資料館に寄せられた多くの皆さんの御激励に、心から感謝申し上げたい。同時に、今後も、さきたま資料館の充実のために、遠慮のない御叱声を積極的にお寄せいただき、皆さんとともに、さきたま資料館が成長し続けられるよう御協力をお願いする次第である。

昭和63年3月15日

埼玉県立さきたま資料館長  
金井塚 良 一

# 県内主要古墳の調査（Ⅰ）

## 行田市高山古墳，白山古墳 及び花園町黒田古墳群の測量調査

学芸課 小久保 徹 杉崎 茂樹  
若松 良一 田中正夫

### 1. はじめに

昭和61年度から、当館の調査研究事業として開始した「県内主要古墳の調査」は、県下に約100基程所在する前方後円墳，前方後方墳と，その他主要な円墳や方墳について，基礎的な調査を行い，埼玉古墳群の成立及び推移を考える一助とするためのものである。

調査の内容は

- (1) 測量図の不備な古墳についての測量調査（必要に応じ小規模な発掘調査を実施する。）
- (2) 現況調査（現状確認，写真撮影）
- (3) 微化石，鉱物分析（出土資料の科学的分析）
- (4) 基礎調査カードの作成（主要古墳についての台帳の整備）
- (5) 文献，地籍図等の収集

等である。

当面，四年次の計画で事業を実施中であるが，昭和61年度は，行田市真名板所在の前方後円墳，高山古墳と，同市長野所在の大形円墳，白山古墳の測量調査，昭和62年度は大里郡花園町黒田所在の前方後円墳，黒田2号墳，ほかの測量調査が主なところであった。以下，その成果を記す。

### 2. 行田市高山古墳の測量調査

#### 古墳の立地と調査の契機

高山古墳は行田市の東部，加須市に近い，大字真名板字堂裏1536ほか，に所在する。付近は利根川の分流の小河川が，北西から東南へと幾筋にも乱流を繰返し，自然堤防が形成されているが，高山古墳は，そうした自然堤防上に立地するものと考えられる（第1図）。なお，付近には，高山古墳以外にも多数の古墳が所在したらしいが<sup>(1)</sup>，現存するのは本古墳のみである。

古墳は薬師堂の境内にあり，山林となっている。昭和49年3月8日付けで，埼玉県史跡に指定されているが，これまで正確な測量図がなかったため，測量調査を実施し，具体的に墳形を確認することにしたものである。

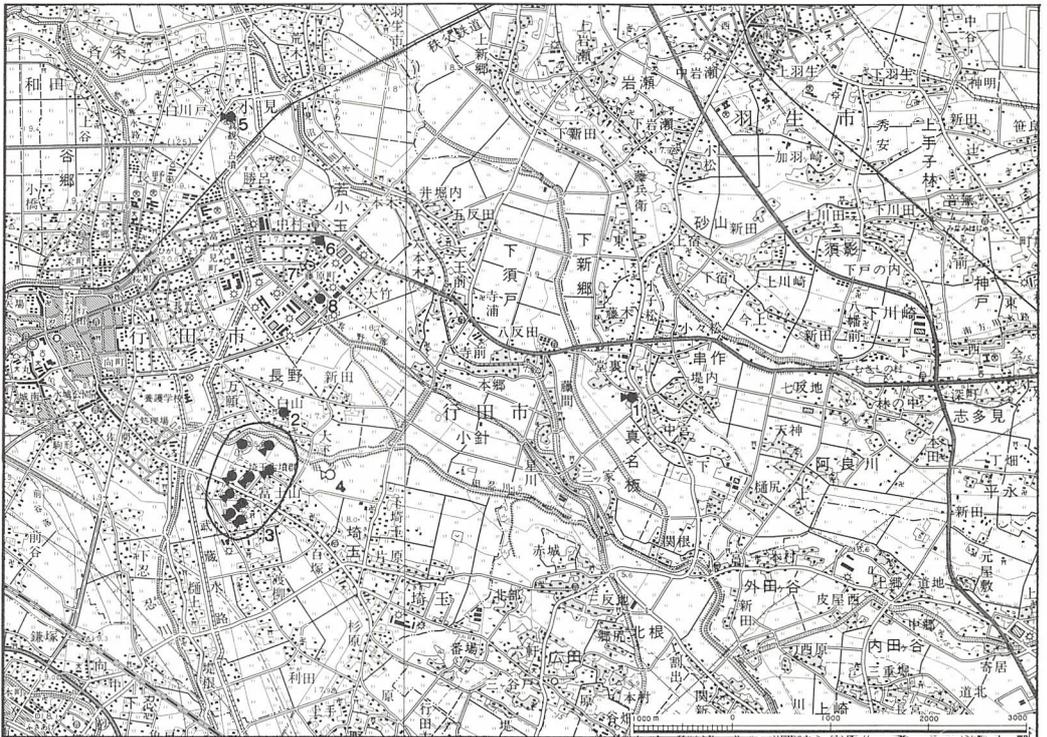
測量調査は，昭和61年4月下旬に準備にかかり，翌5月6日から14日まで実施した。原図の縮尺は1/200とし，等高線の間隔は50cmとした。

## 墳丘の現状と規模

墳丘は、前方部が比較的遺存が良好だが、後円部から、くびれ部は、相当悪く、平面形はあたかもマッチ棒の先端部分のような形態となっている。墳丘上からも、その著しい変形の状況が観察できる。変形の原因の一つには、くびれ部南側の民家であるが、この民家のため、あたかも古墳が折れ曲がったような格好となっている。ここにはかつて寺院が所在していたと言われ、その建設工事等でくびれ部付近が瘦尾根状に変形したものと考えられる。また、後円部も、そうした寺院の造成に関連してであろう、原形を留めているとは考え難い。そして、北側には、墳頂に至る部分まで崩壊の痕跡が残るが、これは付近の河川の護岸工事のために、墳丘の採取が行われたためといわれている。

なお、相当の変形にもかかわらず、埋葬施設は現在までのところ不明であり、遺物の出土も伝えられていない。墳丘の周辺からは、埴輪片が採取されるので、埴輪を樹立していたことは確実であるが、比較的新しい時期の所産と思える。

行田市史<sup>(2)</sup>によれば、「全長約90.5m、後円部の高さ7.3m、前方部の高さ5.4mを有し、後円部の頂に浅間社の石祠を祀ってある。全長の長さに対して幅員は甚だしく狭く後世多量の封土を除去したことが一見して認められる」とあるが、墳丘が高く、浅間社の石祠があるのは、後円部ではなく、前方部であり、前方部を北西に向けた前方後円墳である。



第1図 高山古墳及び白山古墳の位置

- 1.高山古墳 2.白山古墳 3.埼玉古墳群 4.若王子古墳 5.小見真観寺古墳  
6.地蔵塚古墳 7.愛宕山塚古墳 8.八幡山古墳 白ヌキは、湮城古墳

このような状況下で、数値には、不確定要素が多く残るが、今回の調査による古墳の規模は、以下のとおりである。

まず、全長であるが、現状の傾斜変換点での測定では、104.0mである。前方部は、幅52.0m、高さは7.3mである。前面部分の、標高19.5~21.0mの部分は、等高線の間隔が、それ以外の部分に比べ、やや粗となっていてこの部分に段築が存在しており、二段築成と考えられる。前方部東側から、くびれ部にかけては、変形が著しい。

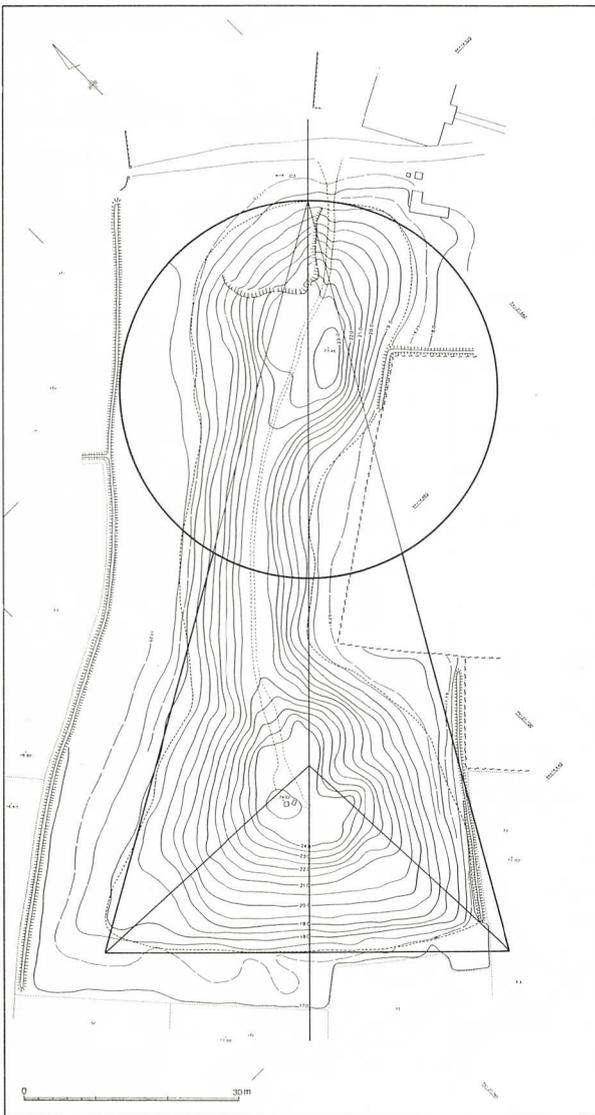
次に後円部だが、くびれ部付近から後円部の変形の著しいことは、再三述べたとおりである。後円部北側の土採取部分とその近辺の墳丘の傾斜変換線の湾曲状況を手掛りとするならば、直径を復原すると、40mは超えているものと思われる。高さについては、6.0mと、前方部より1.3mほど低い。

#### まとめ

高山古墳は、これまで全長90.5mの前方後円墳と考えられてきたが、今回の調査により、104.0mと一廻り大きな墳丘を有することが明らかとなった。後円部を中心に變形しているが、それを考慮に入れても、全長が100mを大きく割り込むことはないものと思われる。また、墳丘のいずれの部分が前方部か、また、後円部であるのかも、これまで明確でなかったが、前方部を北西に向けていることも明らかとなった。古墳の築造時期は六世紀代と考えられているが、同時期の埼玉古墳群の大形前方後円墳にみられる「6：3：3」<sup>(3)</sup>型の復原案を示しておくことにするが(第3図)、正確な墳形あるいは周堀の形態等について、やはり発掘調査を待たねばならない。

#### 註

- (1) 「真名板高山古墳」『埼玉県指定文化財調査報告書第11集』埼玉県教育委員会 昭和51年3月
- (2) 『行田市史上巻』行田市 昭和38年3月
- (3) 上田宏範『前方後円墳』学生社 昭和44年10月



第2図 高山古墳墳形復原図

### 3. 行田市白山古墳の測量調査

#### 古墳の立地と調査の契機

埼玉古墳群の丸墓山古墳、稲荷山古墳の北側には、旧忍川が東流している。そして、その対岸約250mに、所在するのが、白山古墳である。広義の埼玉古墳群に含めて扱われる古墳であり、埼玉古墳群から連続するローム低台地の北辺部分に立地していると考えられる。付近の標高は17mである。

白山古墳の所在地番は、大字長野字白山で、白山社が墳丘に祀られていることからその名称がある。かつて前方後円墳とされたこともあるが、<sup>(1)</sup> 大形の円墳で昭和30年代前半に発掘調査の計画が持上がったが、火事騒ぎで取やめになった経緯がある。これまで正確な実測図がなかったため、測量調査に及んだものである。調査は昭和61年12月21日から12月23日まで実施した。

原図の縮尺は1/100とし、等高線間隔は25cmとした。なお、図に示した北は、磁北である。

#### 墳丘の現状と規模

墳丘の周囲は、北西及び南西が草地となっているほか、北から西が農道を隔てて水田となっている。南側は白山地区の集会場があり、東から東南側は民地で山林である。墳丘は、樹木がまばらに生える草地となっていて、白山社の社殿により、墳丘南西斜面が崩されているほか、集会場及び民地部分で大きく削られている。また、西側の農道も、墳裾部分を削っている。遺存状況は全体的には決して良いとは言えないが、墳頂部から北東の斜面は遺存状況は良好である。

墳頂からやや南に下った部分に、緑泥片岩の石室の壁材が一部露出している(写真5,6)。地元の話によれば、かつて集会場の改築等でこの付近の土を採取したことがあり、石室の壁と床が露出したことがあった。その時の状況からすると現在露出しているのは、奥壁の上部であり、石室は横穴式石室とみて誤りなく、ほぼ南北に軸を置くものであろう。そして床面から、この奥壁の上部までは、2m以上あったらしい。また、側壁は人頭大の角閃石安山岩を積んであり、床面に近い部分が遺存していたという。現在、社殿前の石段の右手に石材の積んだ部分があるが、そのうちのいくつかは、この時に出土した壁材であると言われている(写真7,8)。

さて、墳丘の規模であるが、北東部分の墳丘の遺存の良い部分から直径は、約50mと判断してよいだろう。墳頂部はほぼ平坦であり、最高部の標高は22.74mなので、墳丘の高さは5.7mである。白山神社殿南面の墳裾部分は等高線間隔がやや広がり、段築を形成するが、遺存の良好な北東側には明確に認められないので本来的なものでない可能性が高い。

#### まとめ

今回の調査で、白山古墳は直径50mの円墳と判明した。南から東側の崩壊部分に前方部を想定し前方後円墳の可能性を考えるのは、石室の存在から無理であろう。埼玉古墳群とその周辺では、直径50mの円墳となると、丸墓山古墳(102m)八幡山古墳(74m)に次ぐ大きさである。築造時期は横穴式石室の石材に角閃石安山岩が使用されていることや埴輪が検出されないことから、ひとまず7世紀前半代を中心に考えることができようが、この時期としては、卓越した墳丘規模といえる。埼玉古墳群の最高首長墓の変遷を考えるうえでも重要な位置を占める古墳であることが判明したわけである。

(1) 『行田市史上巻』 行田市, 昭和38年3月







写真1 高山古墳近景



写真2 高山古墳近景



写真3 白山古墳遠景



写真4 白山古墳近景



写真5 白山古墳  
横穴式石室奥壁



写真6 同上



写真7 白山古墳石室側壁材の散乱状況

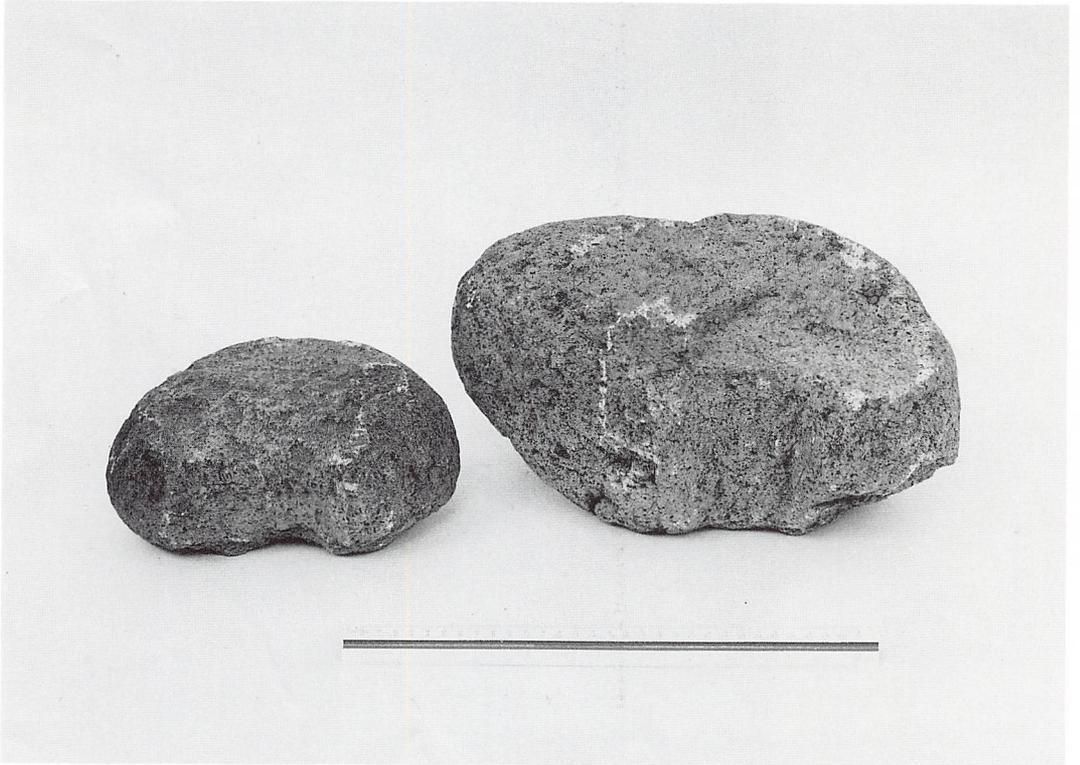


写真8 白山古墳石室側壁材

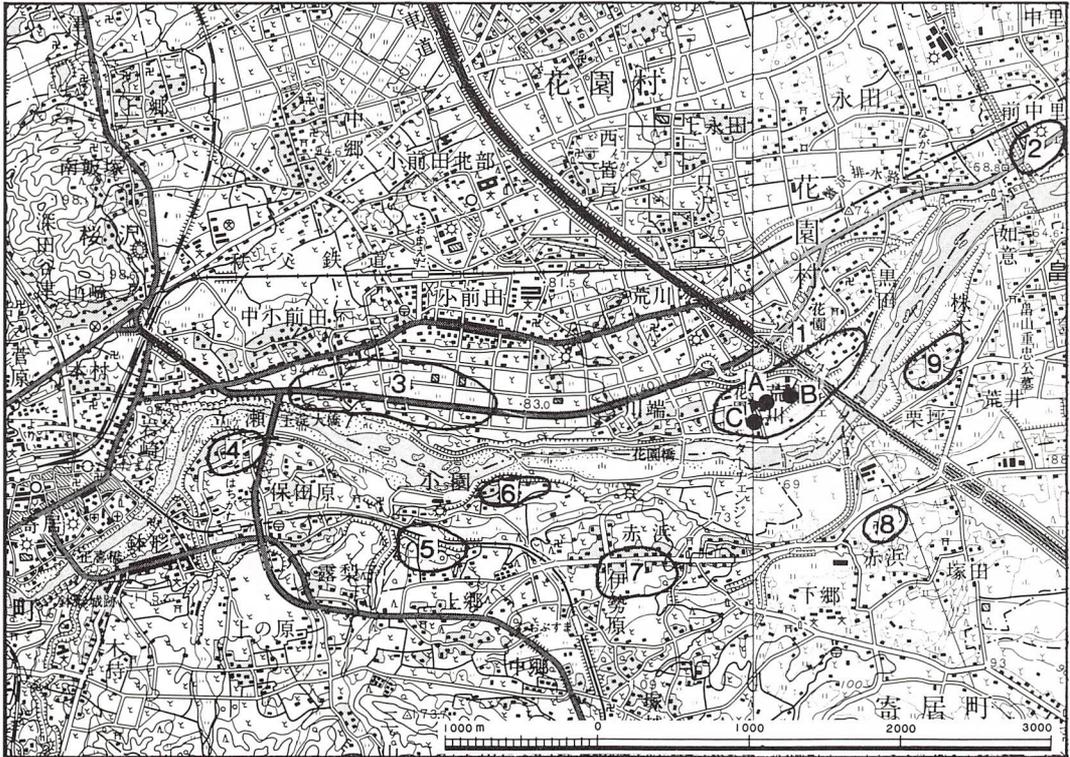
## 4. 大里郡花園町黒田古墳群の測量調査

### 黒田古墳群の現状

大里郡寄居町，花園町，川本町を流れる荒川の河岸段丘上には，大小の古墳群が知られている。（第5図），寄居町から花園町にかけて所在する小前田古墳群や川本町の鹿島古墳群などは中でも規模が大きく，100基前後の円墳を主体に構成されていた古墳群であった。しかし近年の土地改良やその他の開発事業で，こうした古墳群は急速に姿を消しつつある。

花園町黒田ほか，に所在する黒田古墳群も，荒川の河岸段丘上に立地し，6世紀代を中心とする古墳群である。かつては前方後円墳2基と30基以上の円墳が所在していたらしいが，開墾や畑整備でその多くが姿を消していった<sup>(2)</sup>。幸いなことに，前方後円墳である2号墳は，現状保存されているが，測量図もなく，学術的な検討資料に乏しい。荒川の河岸段丘上の古墳群中の前方後円墳は，この黒田古墳群中の2号墳以外ほとんど知られておらず貴重といえ，墳形の具体的状況を把握するため，昭和62年5月7日から13日まで，測量調査を実施した。なお，周辺に遺存する円墳2基（第12，16号墳）も同時に測量調査した。

調査の実施にあたっては，地元花園町教育委員会及び同教委学芸員の森下昌市郎氏並びに，地元の方々には御協力，御高配を賜わった。記して謝意を表する次第である。



第5図 黒田古墳群と周辺の古墳群

- 1.黒田古墳群（A：2号墳，B：12号墳，C：16号墳） 2.見目古墳群 3.小前田古墳群 4.立ヶ瀬古墳群  
5.上郷古墳群 6.小園小墳群 7.伊勢原古墳群 8.赤浜古墳群 9.箱崎古墳群

- (1) 『古墳調査報告書 第4編』(埼玉県教育委員会 昭和35年3月)の古墳分布地図による。
- (2) は場整備関連で記録保存した古墳については下記文献に報告されている。

『黒田古墳群』同古墳群調査会 昭和50年3月

#### 黒田2号墳(所在地: 大字黒田字上川端1905)

周囲を唐黍等の畑に囲まれており、付近の標高は73.9~74.4mで、南方の荒川に向い、わずかに傾斜地となっている。古墳は町の所有となっており、草地となっている。

墳丘は、測量図にするまでもなく、前方部が大きく削られており、西方に突出するような形でわずかに遺存しているにすぎない。したがって、墳丘全長は33.0mであるが、勿論遺存墳丘長ということになる。地籍図を参考にしても前方部の原平面形を推定するのは困難である。一般的な前方後円墳なら、西方の道路が前方部の前面を画する可能性があるが、墳形の確認には、発掘調査を待つほかないであろう。

後円部は比較的遺存は良いが、北側と東側の墳裾は削られていると見てよいであろう。現に北側の斜面には崩壊が認められ、東側は石積がされている。墳頂に近い標高77m付近の等高線は、ほぼ正円形となるが、これと同心円で、比較的遺存のよい南側墳裾を復原すると、後円部直径は約28mとなる。

また、標高76.0m付近は、等高線間隔がやや広い部分が墳丘をほぼ一周しており、二段築成とみてよいであろう。後円部高は、最高点が、78.35mなので、4.2mである。

黒田2号墳の埋葬施設は不明であるが、これまで調査された古墳群中の古墳で判明しているのは全て横穴式石室なので、古墳群の中核となる本墳の場合もその可能性が強く、築造時期も6世紀代とみて、ほぼ誤りないものと考えられる。

かつて、本墳は埴輪が盗掘され、現在町教委に所蔵されている。今回の調査でも墳丘各所から埴輪片が採取され、埴輪を伴うことは明らかである。埴輪については、別稿にて報告したいと思う。

#### 黒田12号墳(所在地: 大字黒田字上川端1887)

上述の黒田2号墳の東北東約200mに所在する円墳である(第9図)。2号墳と同様段丘上の立地だが、墳丘の東南方を走る道路際には河岸段丘の崖面が迫っている。付近の標高は73~74mで現状は草地である。西側には豚舎があり、南西には小さな谷が入り込んでいる。墳丘の東南に臙状に突出する部分があるが、古墳周辺でみつかった礫が集積されたものと考えられ、古墳との関わりはないだろう。

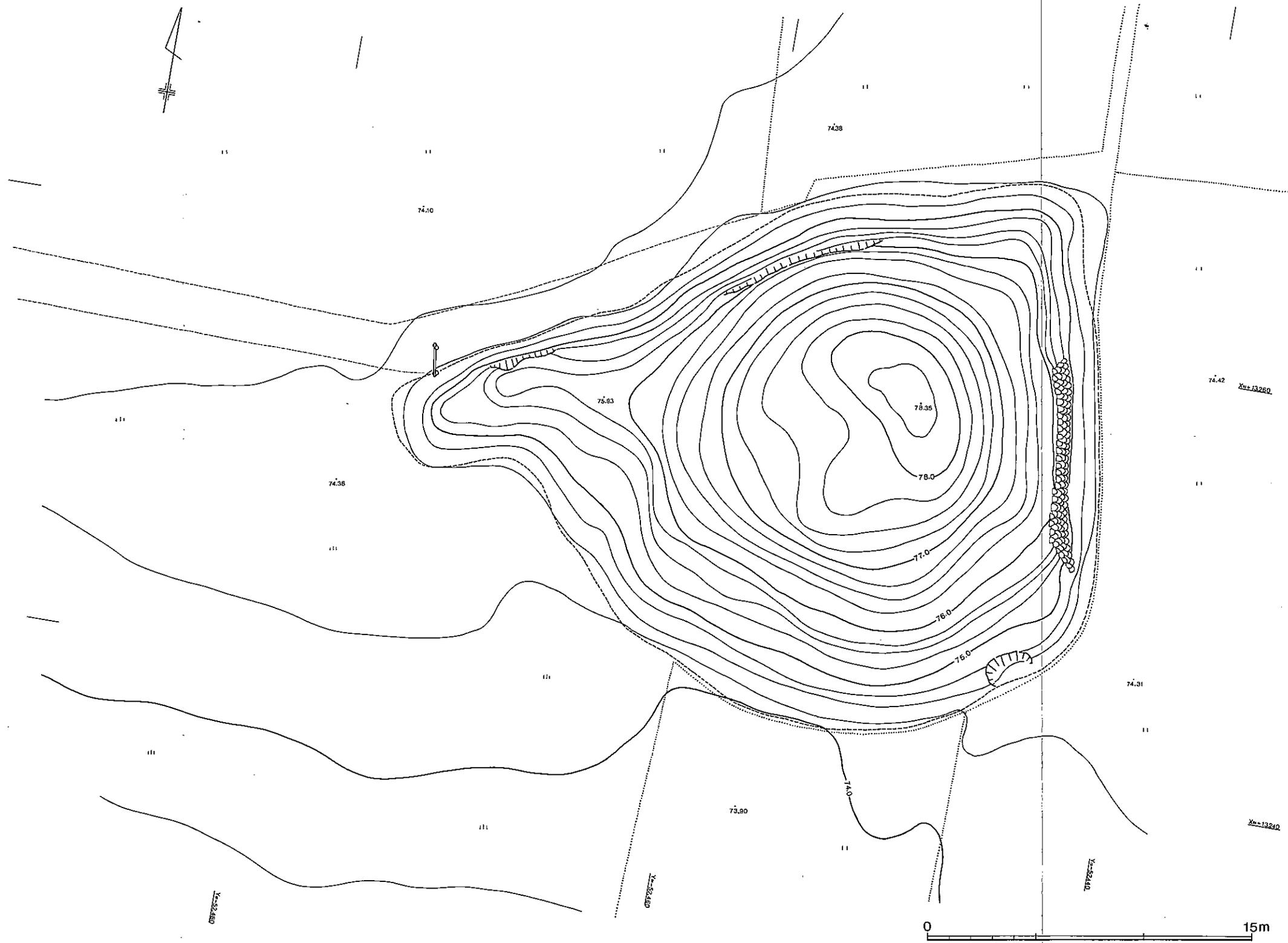
古墳の規模は、北~東にかけての墳裾の傾斜変換線の状況から、直径は約14m、高さは1.7mである。なお、墳丘から埴輪が採取されるので、埴輪を樹立していたことは確実だろう。

#### 黒田16号墳(所在地: 大字荒川字下河原45-1, 2, 3)

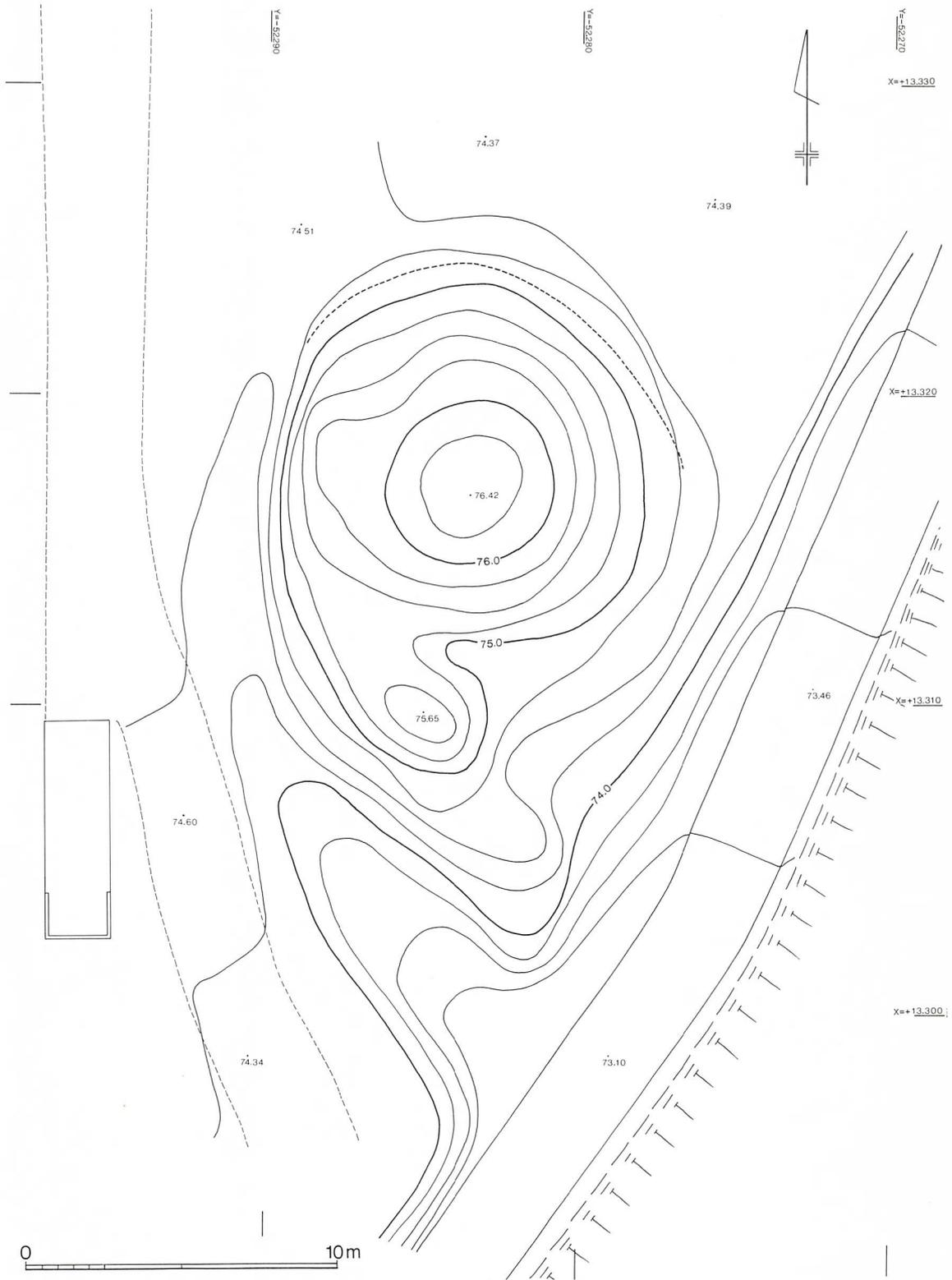
2号墳の南南西約100mに所在し、すぐ南は河岸段丘の崖となっている(第9図)。北、西側は水田であり、東側は南北に道路が走っている。現況は山林である。

墳裾の傾斜変換線からすると、直径約16m、高さは最高点が、標高74.58mなので、1.8mという現況である。

(文責 杉崎茂樹)



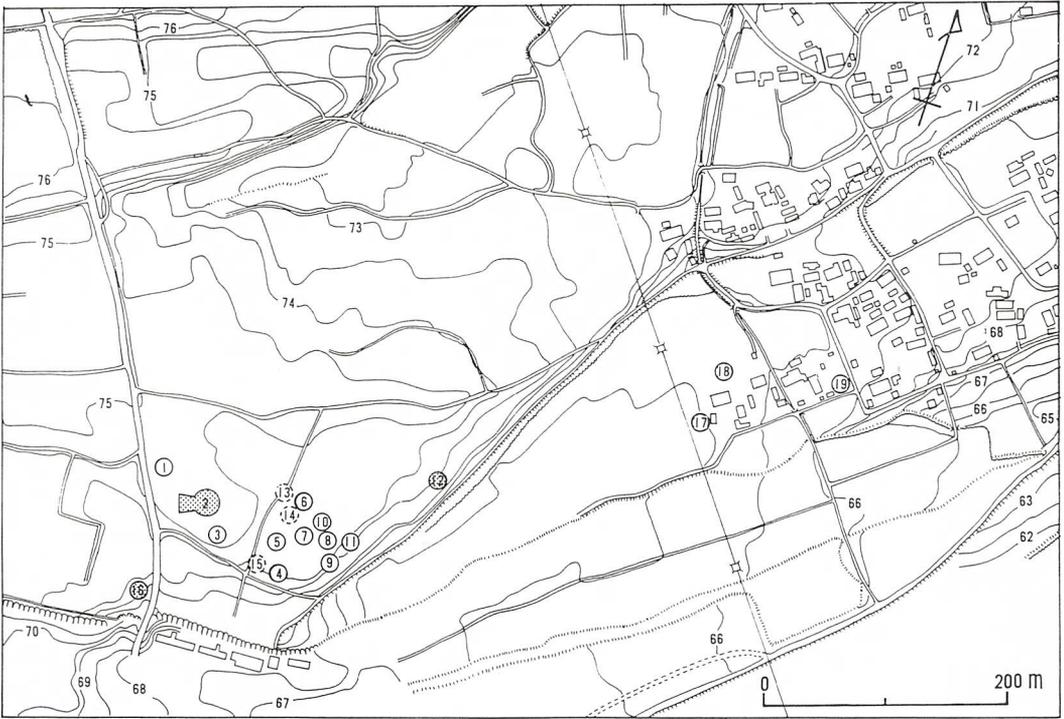
第6图 黒田2号墳測量図



第7図 黒田12号墳測量図



第 8 図 黒田16号墳測量図



第9図 黒田古墳群分布図(『黒田古墳群』同調査会 昭和50年3月による)



写真9 黒田古墳群 航空写真(ほ場整備施行前, 花園町教育委員会提供)



第10図 黒田2号墳地籍図



写真10 黒田2号墳遠景(右遠方は16号墳)



写真11 黒田2号墳近景

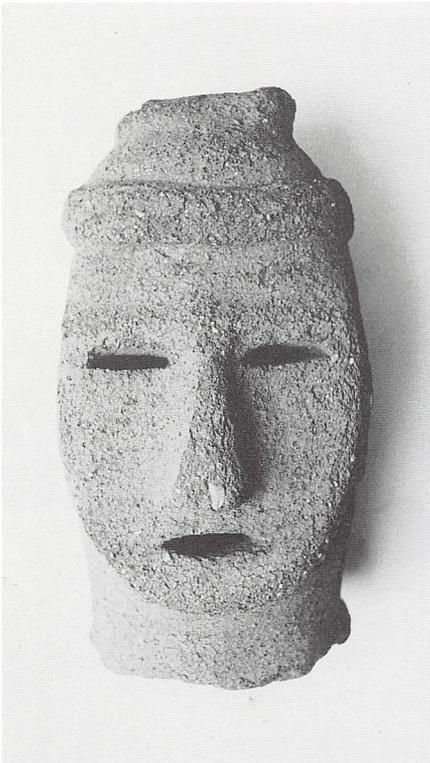


写真12 黒田2号墳出土人物埴輪

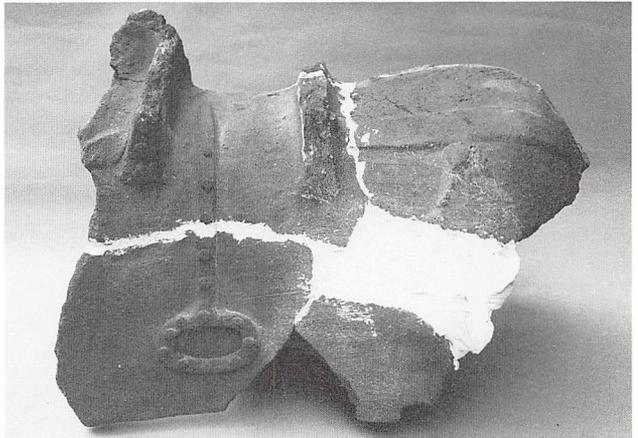


写真13 黒田2号墳出土  
馬形埴輪(体部)

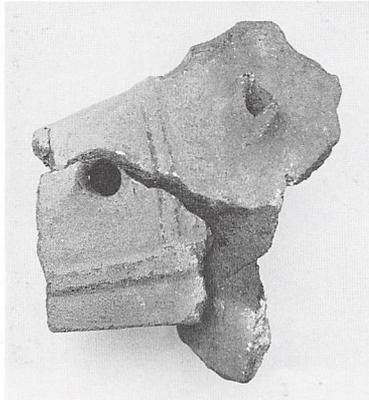


写真14 同上(頭部)



写真15 黒田12号墳近景

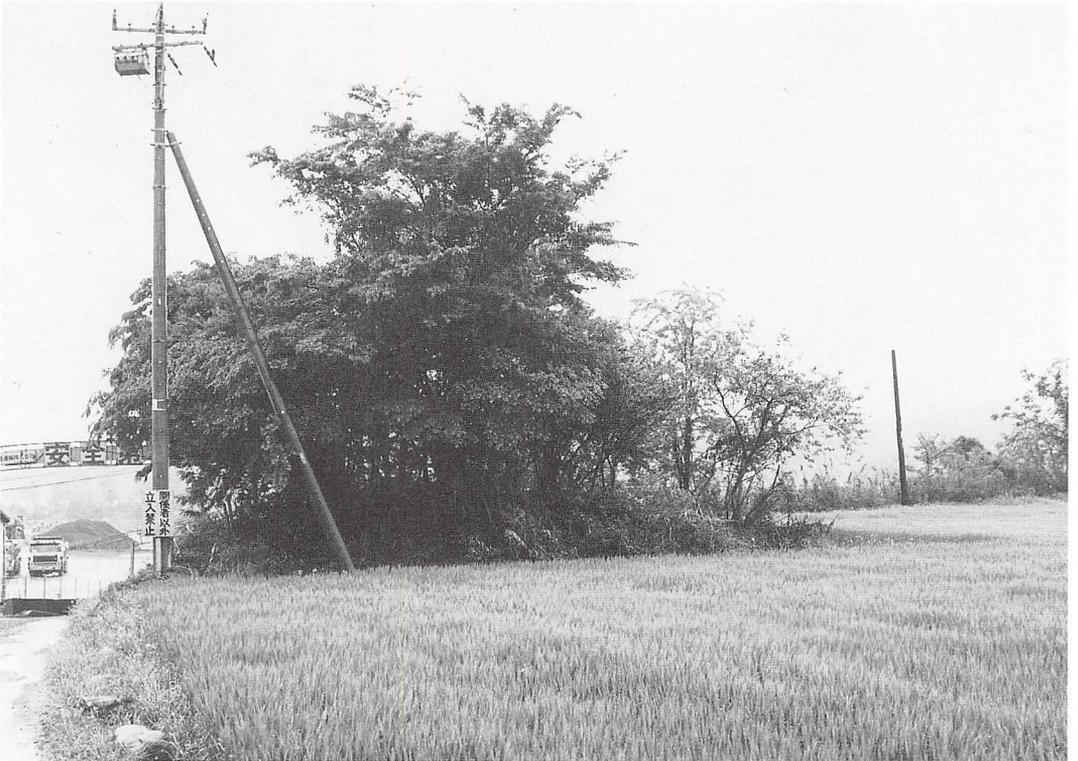


写真16 黒田16号墳近景

# 県指定「農夫埴輪」について

杉 崎 茂 樹

はじめに 当館には熊谷市東別府出土の男子人物埴輪が所蔵されている。笠をかぶり、<sup>(1)</sup> 鋤をかついだ農夫で、昭和57年11月30日付で県指定となった。すでに概要は報告されているが、酷似する二、三の類例があるので、実測図と共に、改めて紹介しておくことにする。

**形態及び製作技法上の特徴** 円筒の台に半身像を作り付け、台を含めた高さは100cmと、農夫埴輪としては比較的大きなものである。台の底径は16~17cm、下から4cmのところには鈍いM字形のタガを有し、上方に左右一対の小さなスカシ孔があり、内外をタテハケメで仕上げる。胴体は円筒の台から連続的に作るが、下方に開く傘状に粘土を貼り、上衣の裾を表現し台部とは区分される。胸から肩にかけては横断面を楕円形にし、両側面部に棒状に作った腕を挿入し、粘土を充填して接合する。胴体部分は外面をタテハケメを主に、内面はタテハケメとナナメハケメで仕上げている。腰帯(紐)が粘土紐を貼り表現されるが、右側面が剥落しており、痕跡から結び目があったものと思われる。正面には大きな刀子がこの帯から下がっている。腕は、右手が鋤(一部欠損)を肩に担ぎ、左手は胸にあてがい、指を沈線で表現する。頭部は首から顔の上方まで略同じ太さの円筒状で、頂部は丸く作り粘土を鏝状に裾に貼って、菅笠を表現している。頂部中央に剥落痕があり、飾りが付けられていたものと考えられる。顔面は円筒部に粘土を平らに貼って作る。目、口とも扁平な木ノ葉形に穿孔し、眉は、高い鼻の上部から顛顛まで、長く扁平な粘土紐で表現する。顔面の両側には太い棒状の粘土で上角髪と、その前面には耳環が付けられているが、耳の表現はされていない。

**同巧の類例について** 農夫埴輪は県内でも数例の出土例が知られ、関東全体では相当な数にのぼると思われる。その多くが半身像で、片手で鋤を担ぎ、他方の手を胸(又は腰)にあてがうといった定形化したポーズをとるが、とりわけ、この東別府出土品と酷似するのが、長瀬総合博物館所蔵品(写真)と京都国立博物館蔵の群馬県太田市脇屋出土品(重要美術品)<sup>(2)</sup>である。

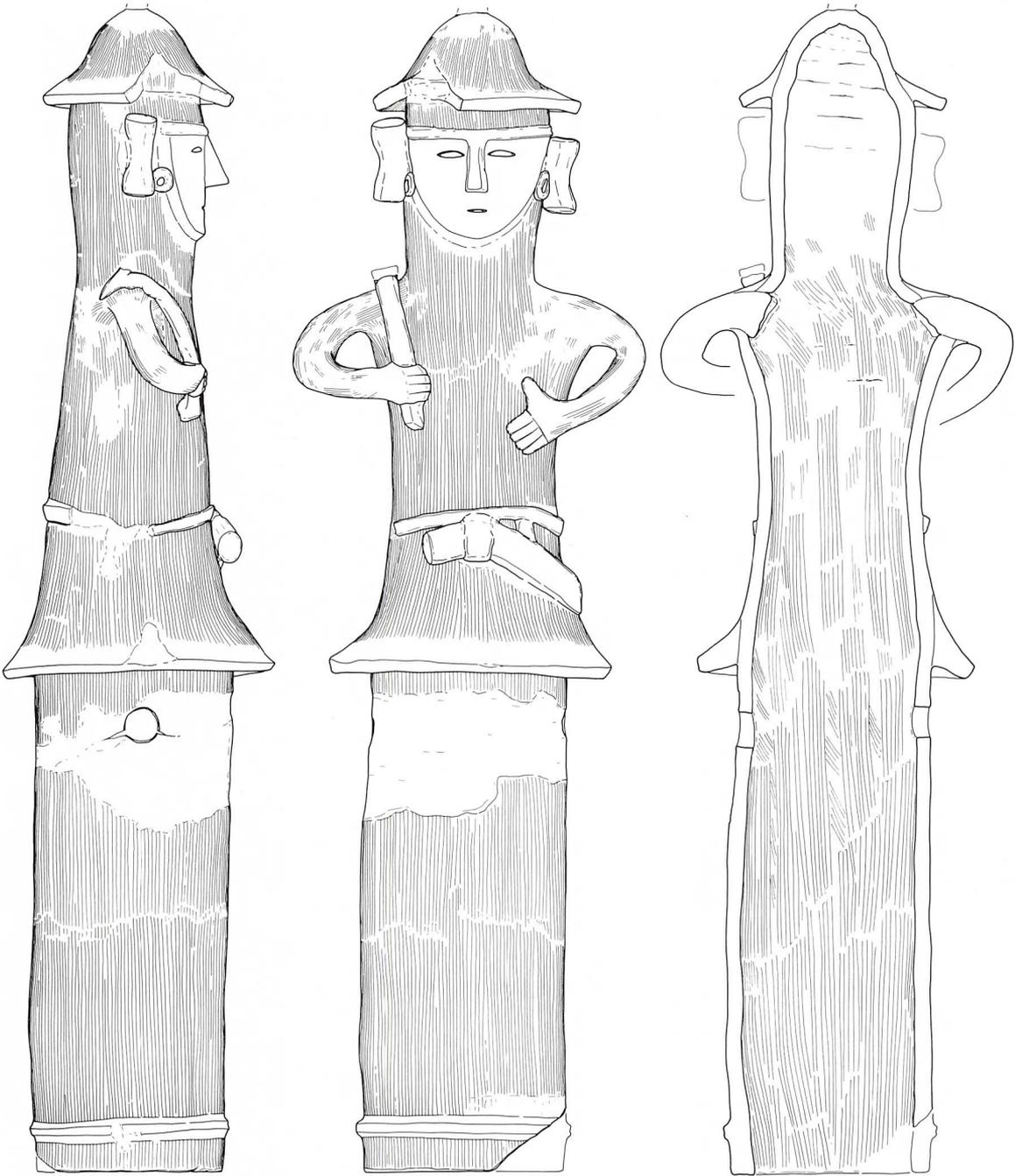
長瀬総合博物館のもの(以下「総博蔵品」)は全高93cmと、東別府出土品より一回り小型で作りはやや雑だが、円筒に上半身を作り出し、鋤を担ぐ様子や上角髪と菅笠の形態など非常によく似ている。ただし、鋤は左手で担ぎ、耳環は装着していない。出土地は遺憾ながら不明である。

次に太田市脇屋出土品だが、総博蔵品よりさらに小さく全高75cm、やはり半身像で、右手に鋤を担ぎ左手を体側にあてがうポーズや刀子、角髪、菅笠など、おおまかなところは、東別府出土品に似ている。ただ、首に玉飾りをする点は異なる。

以上の三点は、同一の埴輪製作工人の作と考えるのは、表状など細かな作りに差があり無理と言わざるを得ないが、共通のモデル(それがこれら三体のいずれかである可能性もあるが)が存在するとみてよいだろう。共通のモデルを有するということであれば、三体の製作工人は、同一の集団でないにしろ、極めて近親的な工人集団の製作と認めてよいように思われる。利根川をはさみ、北武蔵と上毛野で酷似した農夫埴輪が出土している事実は、埴輪工人の動向を考えるうえで興味深い。

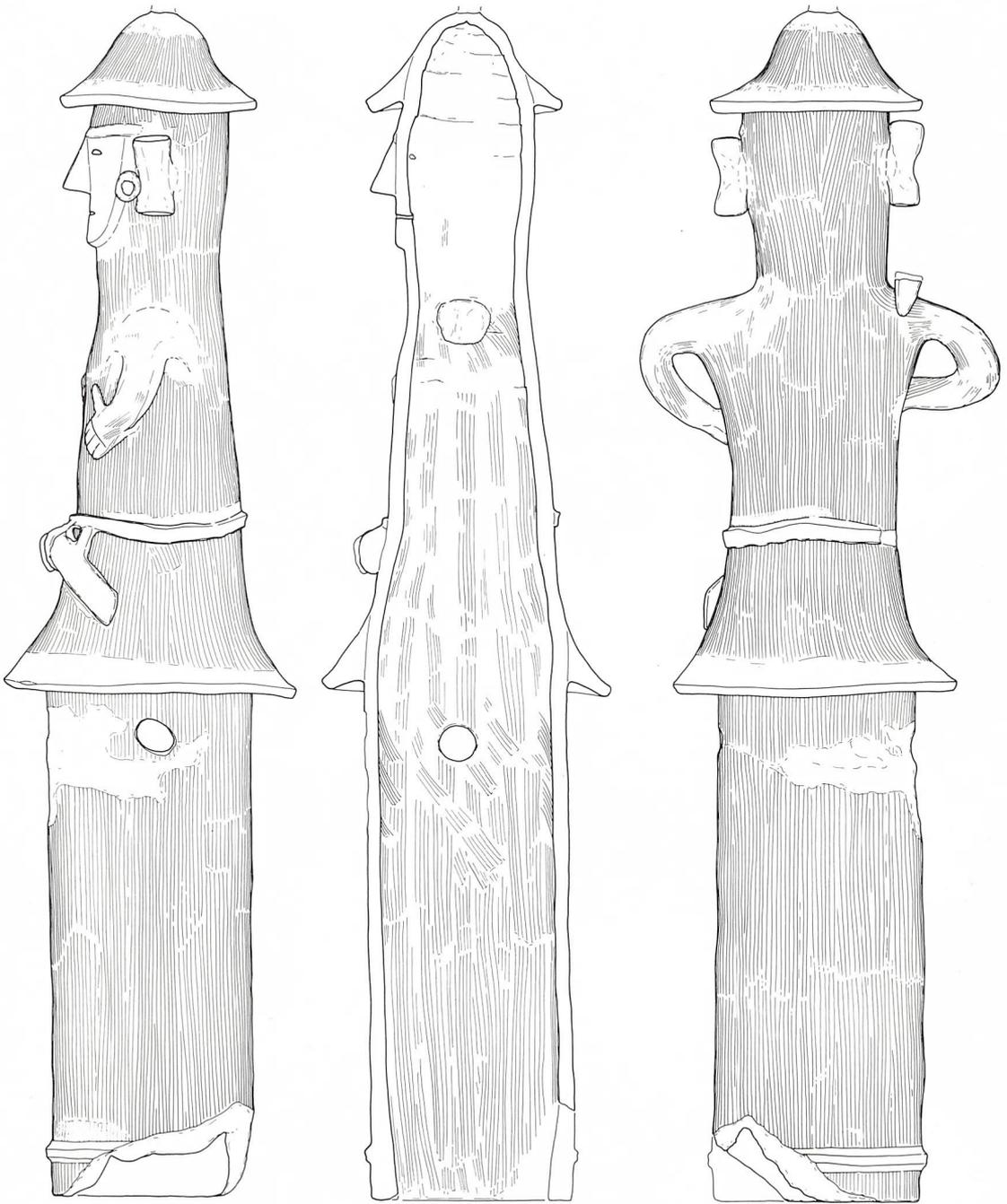
(1) 『埼玉県指定文化財調査報告書 第14集』 埼玉県教育委員会 昭和59年3月

(2) このほか 鴻巣市生出塚埴輪窯跡からも同巧と思われる農夫埴輪が出土している。(増田逸朗ほか『生出塚遺跡』同遺跡調査会 昭和58年3月)



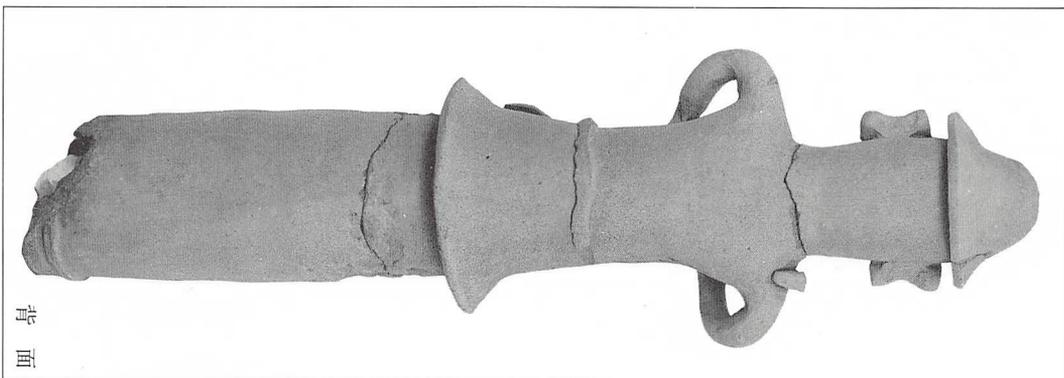
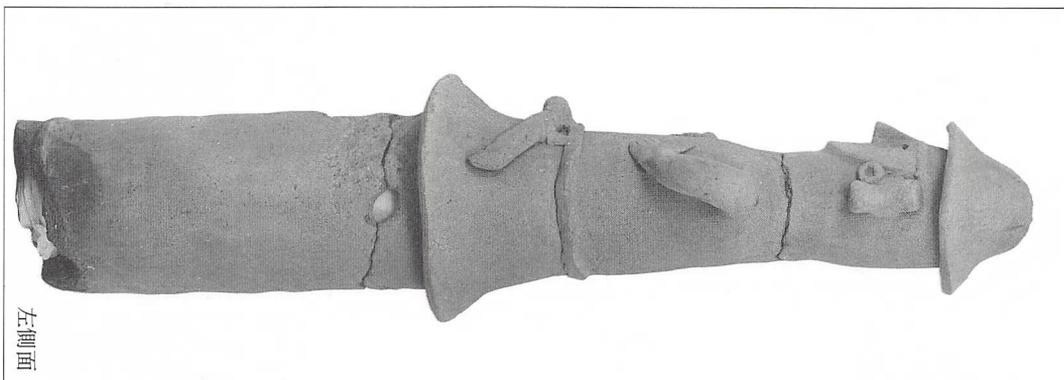
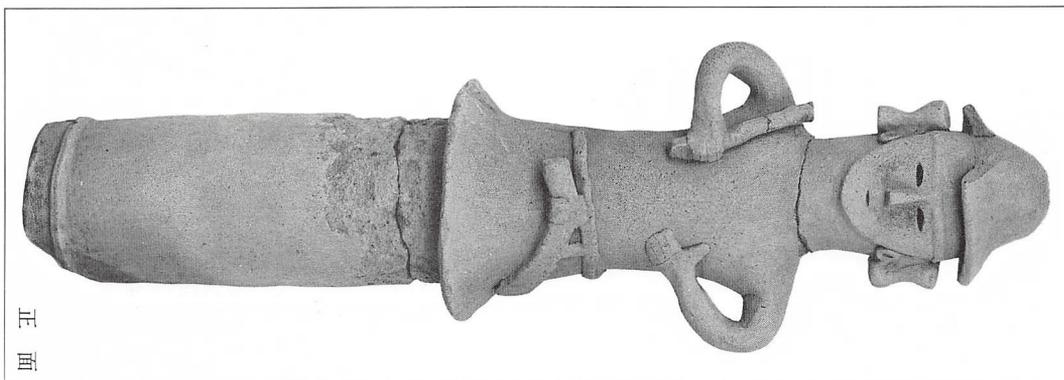
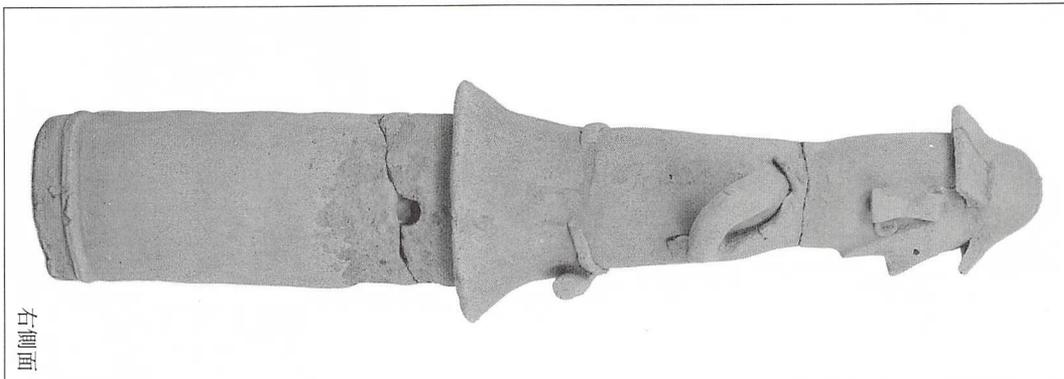
0 20cm

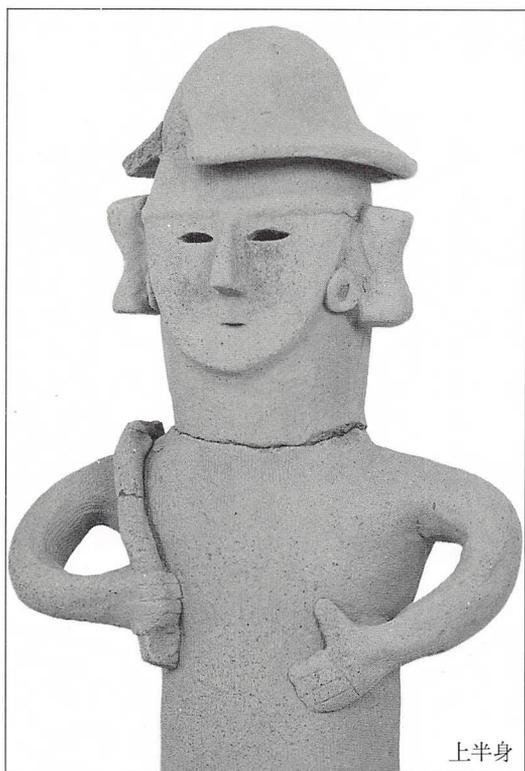
農夫埴輪実測図(1)



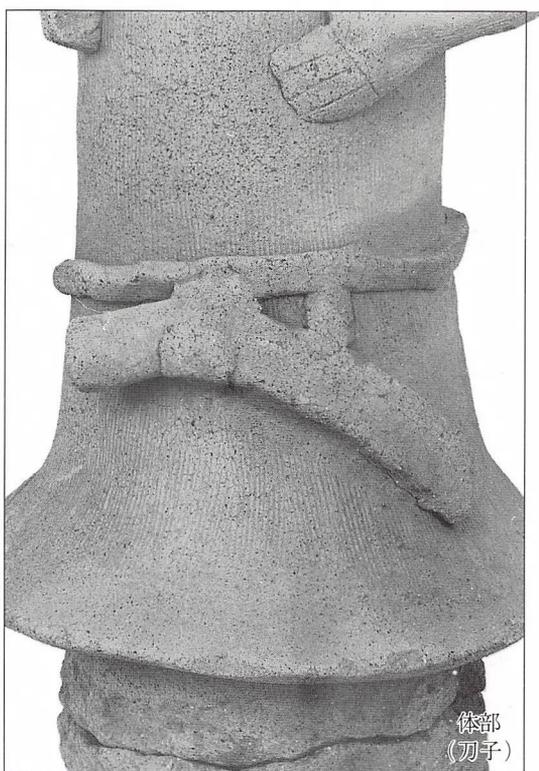
0 20cm

農夫埴輪実測図(2)

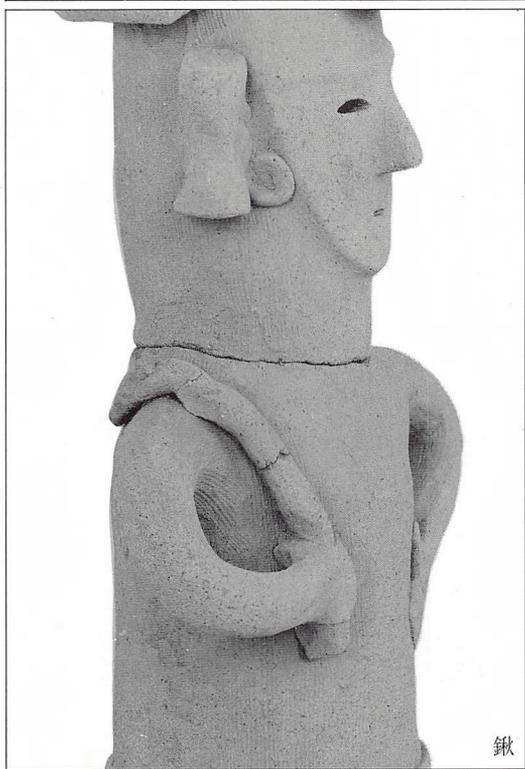




上半身



体部  
(刀子)



鍬



参考：長瀬総合博物館所蔵  
農夫埴輪

# 将軍山古墳出土遺物の資料調査報告（Ⅰ）

—— 鉄 鏃 ——

田 中 正 夫

将軍山古墳は、埼玉古墳群に属する前方後円墳で、稲荷山古墳の南南東100 m程のところに所在する。全長・102 m、後円部径57 m、高さ（残高）5 m、前方部幅（推定）50 m、高さ（残高）8.2 mを測る。墳丘は、宅地化などにより著しく変形している。1893年（明治27年）に、内部主体の石材の一部が露出し、地元村民により発掘された。内部主体は、「房州石」を側壁とし、天井石に緑泥片岩を用いた横穴式石室と<sup>(1・2)</sup>考えられている。

埼玉古墳群のなかで、内部主体、副葬品が知られているのは、この将軍山古墳と稲荷山古墳だけである。将軍山古墳の副葬品は、銅鏡・高台付有蓋銅鏡・挂甲小札・金銅環頭大刀・横矧板鋌留衝角付冑・金銅棘葉形杏葉・蛇行状鉄器・石製盤・水晶製三輪玉・須恵器無蓋高杯など多数がある。これらの遺物から、将軍山古墳の築造年代は、6世紀後葉と考えられ、埼玉古墳群の大型前方後円墳のなかでは新しい時期に比定されている。

また、昭和59年に行われた周堀の確認調査により、将軍山古墳には、埴輪が樹立され、二重の周堀をもつ可能性が高いことが指摘<sup>(3)</sup>されている。



将軍山古墳遠景

將軍山古墳から出土した遺物は、現在、東京国立博物館・東京大学総合研究資料館・本庄市教育委員会・行田市教育委員会・埼玉県立博物館などに分散し、収蔵されている。本稿は、これらの將軍山古墳出土と伝えられる遺物のうち、当館収蔵の鉄鎌と、行田市教育委員会の御好意により、行田市教育委員会収蔵の鉄鎌を、資料紹介するものである。

今回とりあげた鉄鎌は計14点である。鎌身部先端から基部下端まで遺存するものはなく、いずれも錆化が進み、形態の不明瞭な部分もある。すべて長頸鎌であるが、鎌身部の形態により2大別される。1つは両刃で、鎌身部の上半が短い柳葉の形態であるが、片側だけ刃部が下部に続き、鎌身部下半では片刃箭の形態を示し、小さな逆刺がつく。逆刺はあまり外反せず、深くもない。刃部の短い側は、緩やかな関をもつ。鎌身部の断面形は、上半部では、片平鑄を呈し、下半部では片切刃に近い形を呈する。筥被部の断面形は長方形を呈する。鎌身部から筥被部・基部にかけて遺存するのは1点だけであるがその筥被は棘状突起をもつ棘筥被である。この形態の鉄鎌は、後藤守一氏の分類の「片小爪片挾棘筥被鑿箭式」や「両小爪鑿箭式」に近い形態であるが、関の形状・断面形の点で異っている。

もう1つは片刃箭で、鎌身部の断面形は平刃である。鎌身部には小さな逆刺を有するが、逆刺は外反しない。筥被部の断面形は長方形を呈するが、上記の形態のものよりは、やや太めである。

図版の5は、鎌身部の上半を欠損して、現況では片刃箭に見えるが、他の片刃箭と比べて筥被部が細く、上記の、鎌身上半部分だけ両刃となる形態と思われる。11~14は頸部のみを残すものであるが、いずれも棘筥被である。基部には、木質と樹皮が部分的に残っている。

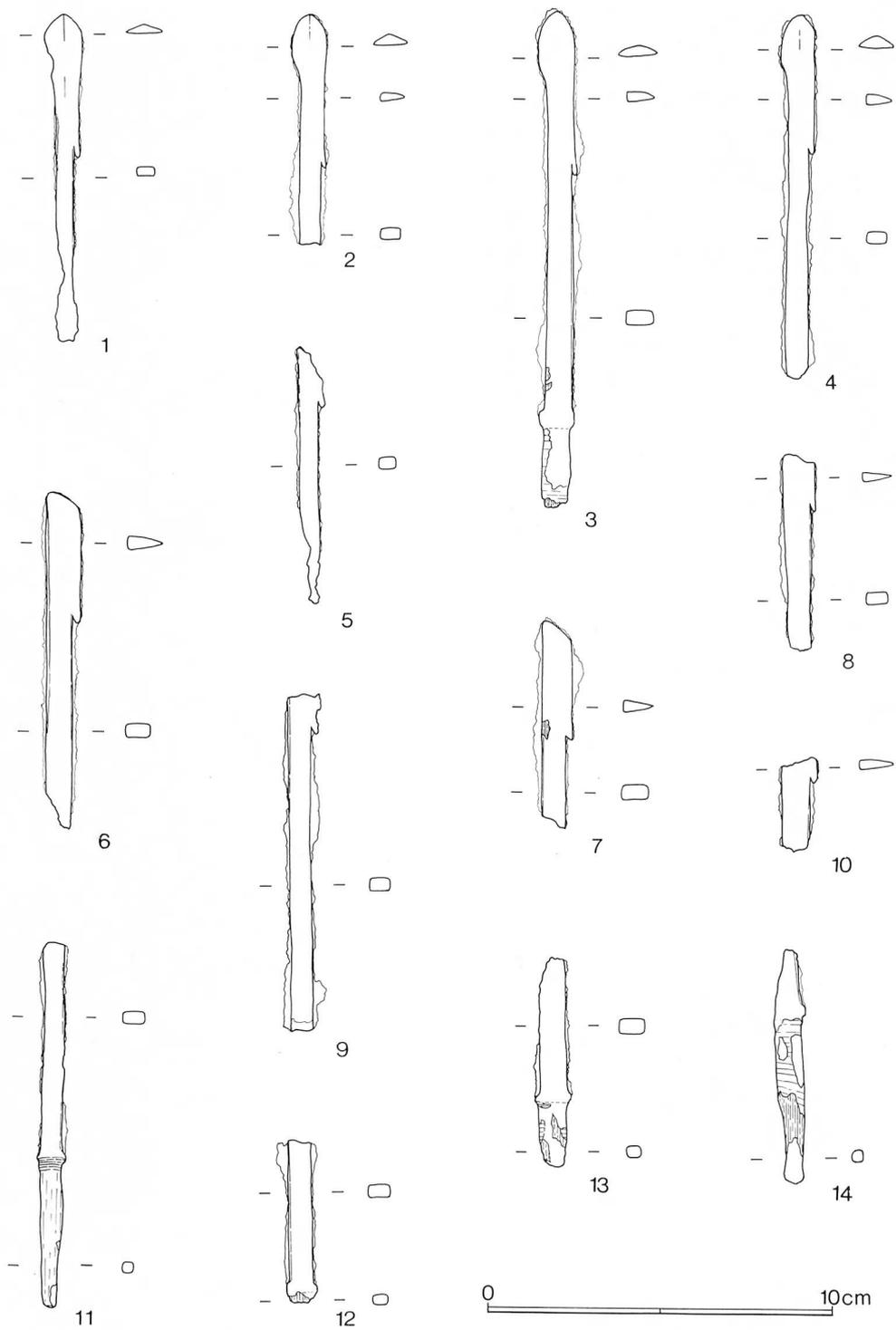
以上をまとめると、片刃箭は、完形品であるならば、長頸棘筥被腸挾平刃箭式であると思われる。両刃のものは、鎌身の平面形態以外をまとめると、長頸棘筥被腸挾片平鑄式と表現できる。

#### 計測表

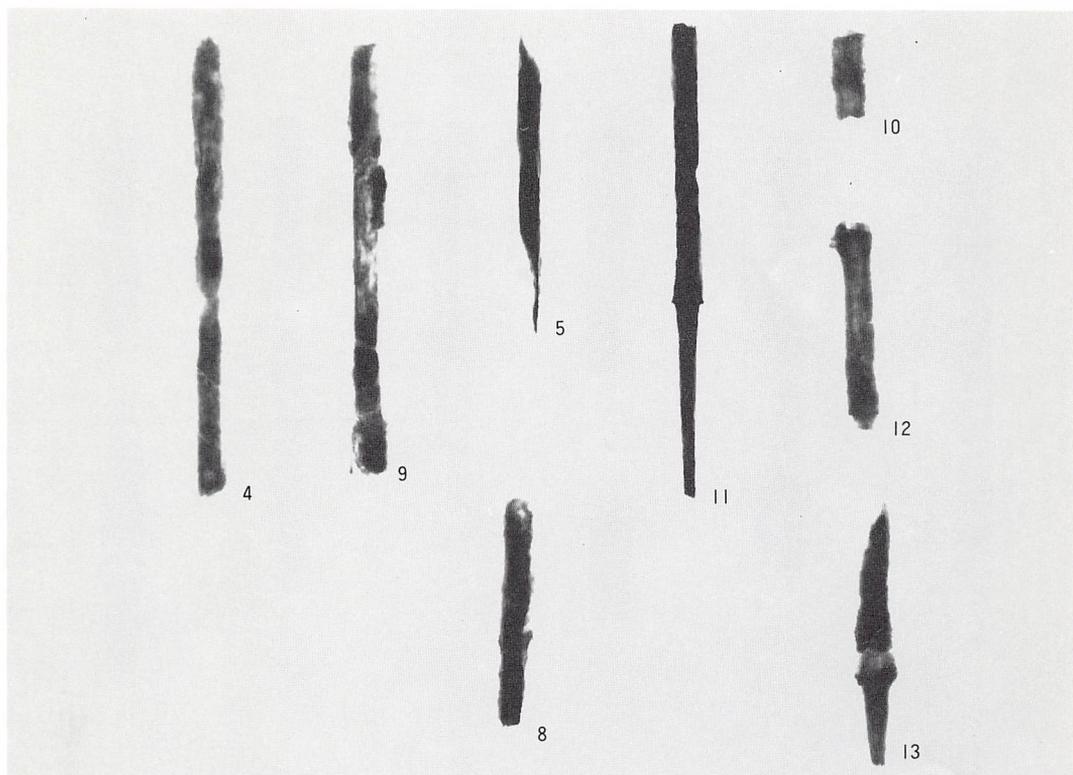
番号	全長(cm)	重量(g)	残存部分	番号	全長(cm)	重量(g)	残存部分
1	9.6	9	鎌身部・筥被部の一部	8	5.7	8	鎌身部の一部・筥被部の一部
2	6.7	9	鎌身部・筥被部の一部	9	9.8	14	鎌身部の一部・筥被部の一部
3	14.5	20	鎌身部・筥被部・基部の一部	10	2.7	3	鎌身部の一部・筥被部の一部
4	10.6	13	鎌身部・筥被部の一部	11	10.8	14	筥被部の一部・基部の一部
5	7.5	6	鎌身部の一部・筥被部の一部	12	4.8	7	筥被部の一部
6	9.9	15	鎌身部・筥被部の一部	13	6.2	8	筥被部の一部・基部の一部
7	6.2	9	鎌身部・筥被部の一部	14	6.9	6	筥被部の一部・基部の一部

#### 註

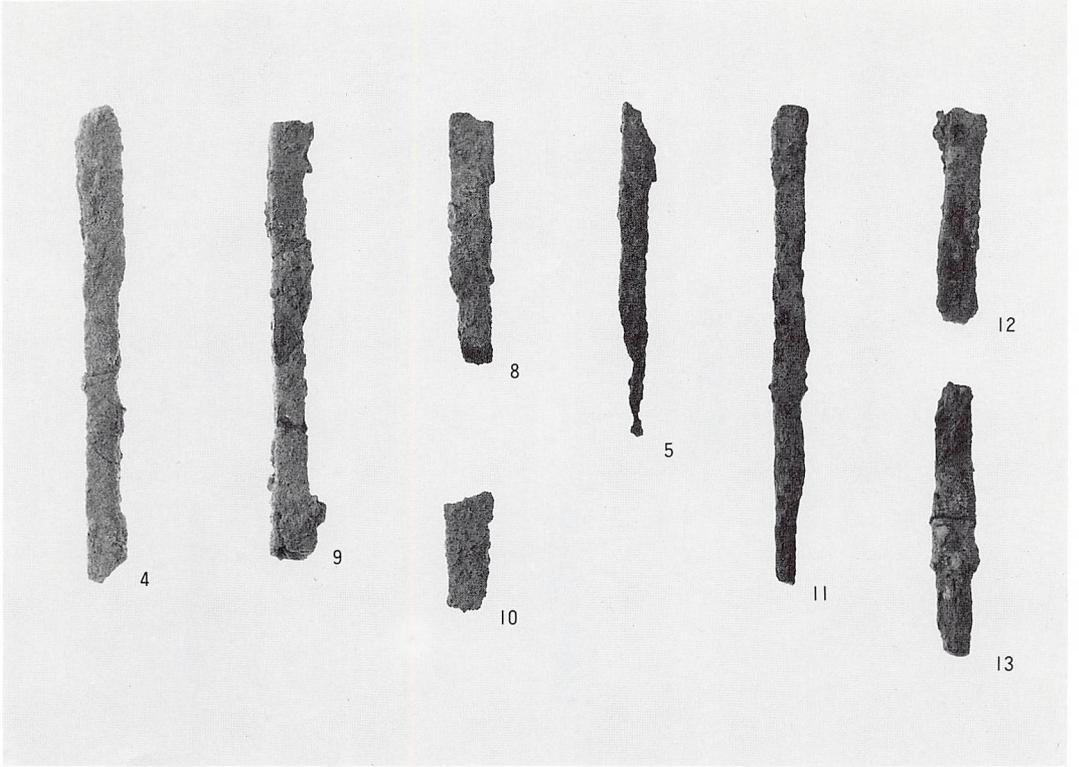
- (1) 山口 平八 1963 『行田市史』 行田市
- (2) 金井塚良一 1987 「埼玉將軍山古墳の性格をめぐって」『埼玉の考古学』 新人物往来社
- (3) 杉崎 茂樹 1988 『丸墓山古墳及び丸墓山南方円墳群付將軍山古墳』 埼玉県教育委員会
- (4) 田中正夫他 1983 「埼玉県における古墳出土遺物の研究 I——鉄鎌について——」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 本稿での鉄鎌の部位の名称・型式名はすべてこれによる。
- (5) 後藤 守一 1939 「上古時代鉄鋼の年代研究」『人類学雑誌54-4』 東京人類学会



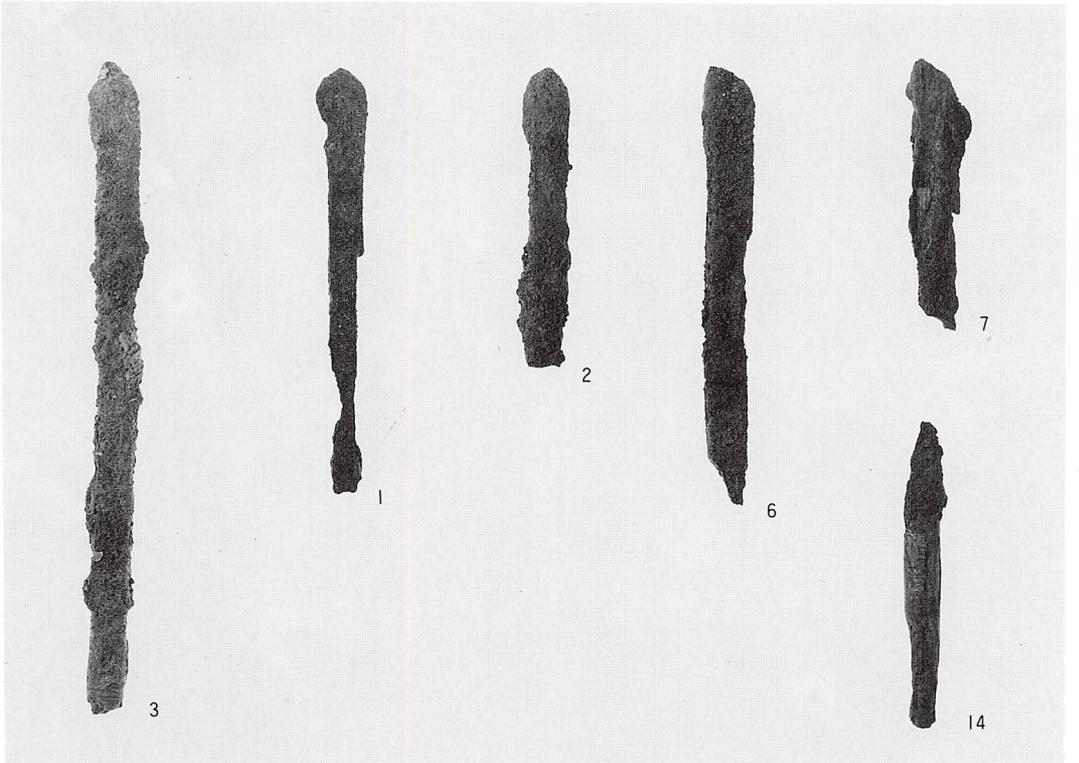
將軍山古墳出土鉄鍬実測図



將軍山古墳出土鉄鏃X線写真



將軍山古墳出土鉄鎌(1)



將軍山古墳出土鉄鎌(2) 行田市教育委員会収蔵品

# 入間川の水神信仰

柳 正 博

## I はじめに

秩父・入間両郡の境をなす妻坂峠の近くを源とする入間川は、県西部を東西に流れ、上江橋付近で荒川と合流する全長約51kmの河川である。この川の上流の、名栗村や飯能市の山々は、良質の杉・檜が生い繁る土地として古くから知られてきた。ここで産出される木材は「西川材」と呼ばれ、大正年間に陸上交通が発達するまでは、筏を流し、江戸（東京）へ運ばれた。また、各地で橋を架ける以前は、渡船が行われ、兩岸を結ぶ交通路として一役を担っていた。入間川の水は、流域のかんがい用水や水車の動力源にも利用され、農作物の生産に大きく貢献した。このほか、川漁の場としても機能し、多くの水産資源を供給している。

このように、入間川は、流域の人々の暮らしと密接に結びつき、恵みを与えた。しかし、大雨の折にはたび重なる水害をもたらし、沿岸地域を困惑させ、入間川に対する恐怖の念を抱かせたことも事実である。こうした川と生活とのかかわりを通じ、水にまつわる神である「水神」は、入間川流域においても、各地で信仰されてきた。水神信仰の様相は多岐にわたり、全体像をつかむのはなかなか容易でない。

入間川における水神信仰の調査は、沿岸の市町村で進められているほか、さきに（昭和58～62年度）埼玉県が実施した「荒川総合調査」の一環としても行われている。また、埼玉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている歴史の道調査事業「入間川水運」のなかでも調査項目に取り上げられ、多くのデータが集められている。

小稿では、筆者自身の調査とこれらの資料を中心に、入間川の水神信仰についてまとめ、若干の検討を試みるものである。

## II 水神信仰について

ふつう「水神」と呼ばれる神には、いろいろある。元来は「水の神」一つとしてとらえられていたものが、時代の流れとともにさまざまな考えが導入され、複雑になった。すなわち、いわゆる水神宮として祀られている神のほかに、水天宮や弁才天、九頭龍神、あるいは金毘羅宮や大杉大神なども水神として信仰されている。そしてこれらの神に対する信仰内容は、必ずしも一律でなく、簡単には把握できない。

荒川総合調査で調べられた事例を見ると、水神の信仰内容は、飲料水やかんがい用水等の守護神

としての水神、筏乗りや船頭など水運業者の祀る水神、水難除けや水害除けの水神、漁業関係者が漁撈の安全と豊漁を祈って祀る水神、あるいは椀貸淵の伝承等をあげることができる。

水神信仰をどのように類型化したらよいかという点については、にわかには決められる事柄ではない。ここでは、荒川総合調査等の成果をふまえ、また、今回の調査のデータをも考慮に入れ、とりあえず次項に示すいくつかのタイプに分けて報告することにする。

### Ⅲ 入間川の水神信仰

#### (1) 筏師や船頭が祀る水神

冒頭でも述べたように、入間川（名栗川）上流の山地は、西川材の供給地で、大正初めごろまでは筏をさかんに流していた。伐採した木材は、ふつう名郷（名栗村上名栗）まで運び出し、そこからサナガシ（一本流し）が行われた。そして、森河原（名栗村上名栗）から筏を流し、飯能河原で継ぎ立てを行った。名栗から飯能の間は、大きな岩が多く、また、流れも急で、筏流しにとっては難儀な場所であった。

飯能市赤沢のM製材所内に祀られている水天宮祠（図版1-2）は、筏流しの安全という意味が含まれていた。この祠は、かつては川の淵のほとりに祀られていた。その後、ここへ堰ができ、水車へ水を引いて麦搗きをしたり、あるいは水力による製材が行われるようになると、円滑に稼動するよう水天宮へ水の確保を祈願したともいわれる。

この水天宮祠から少し下流の、茶内の川原には大きな岩があり、その上に弁天祠（図版1-3）が祀られている。茶内には、山から運び出した木材を集積し、筏を組む土場があったことや、この岩のそばは筏にとっての難所であったことから、安全な運行を弁天祠に祈願したといわれている。筏が姿を消した現在でも、例年4月末には茶内全体で集まり、ここでお日待が行われる。

飯能市原市場、二ノ瀬橋下流の左岸の川べりの岩の上にも弁天祠がある。この祠も筏乗りの安全を祈って祀られたものであると伝えられている。

飯能河原に面した入間川左岸の段丘上は、筏宿が立ち並んでいた。この並びに水天宮（図版1-4）が祀られている。飯能河原で筏の継ぎ立てが行われていたことや、祠が筏宿の続きにあることから、ここも筏と関係する水神のように見えるが、今回明確な伝承をつかむことはできなかった。

次に、渡船に関係する水神について述べることにする。

川越市鯨井と同市小ヶ谷を結んでいた鯨井の渡しのそばに、かつて金刀比羅宮が祀られていた。現在のこの祠は、堤内のT家の屋敷神として祀られている。T家は以前、鯨井の渡しで渡船を営み、祠はその祖先が建てたものといわれる。これについては、次のような記録がある。

当宮の創立年紀は詳かではないが、記録によると文化2年11月25日(1805)、当時の主、田中宗八が再興したとあるから、それ以前に祀られたものと思われる。その頃から田中家は、入間川の渡船を行っており、地区内の人が舟のこぎ手として働いていた。そして金刀比羅宮を祀り、舟の安全を祈願し崇敬していたものである。明治43年に当地方を襲った大洪水により、家・社ともに流されたが、社は下流で発見回収し、当時の主、辨藏が別記9名の崇敬者の浄財により、大正2

年9月15日に再建した。

大正8年、雁見橋が完成したため、家・社は同橋の坂下に移転、さらに昭和34年、道路改良工事のため現在地に移転し、社を屋敷内に祀った(図版2-4)。

以上がこの金刀比羅宮が祀られたいきさつであるが、渡船の行われなくなった今は、「未来永劫に広く世の人々に家内安全、交通安全の御加護あらんことを願ひ、この場所へ遷座する」といって、信仰内容を新たに、祈願している。

川島町下大屋敷の、旧土橋渡しに祀られた水天宮碑(図版2-5)には、「発起人 土橋渡船場世話人 岩田仁助 山田市茂 山田保次 笠井清司 宇津木政吉 明治四十五年六月建立 昭和二年三月再建 石材寄附者 笠井清司」という刻銘がある。この渡船場は、明治の中頃設けられ、現在の川島町下大屋敷と川越市芳野台を結んでいた。今は出丸橋が架設され、その北側50メートルほどのところへこの碑が建っている。渡船が行われていた時代には、碑のそばへ渡し守の家があった。それから判断すると、渡船場の安全を祈願したものと思われるが、造立時代(明治45年)を見ると明治43年の大水と関連して、渡船場を洪水から守るという要素が含まれていることも考えられよう。

川島町出丸中郷、県道平沼・中老袋線沿いに、金比羅宮を祀った祠がある(図版2-6)。この中に石祠があり、「文化十癸酉四月 願主 井上文右衛門」という銘がある。伝承によれば、文右衛門なる人物は船乗りで、他所からここへ移って来た折に金比羅宮を祀った。以来、水神として出丸中郷の人々からも信仰されるようになったという。

## (2) 飲料水や農業用水の守護神として祀る水神

狭山市を流れる入間川右岸の段丘上、大字入間川の諏訪神社の近くに、清水のわき出口がある。ここへ「水祖神」と銘のある水神、それに古くから「水神さん」と呼ばれてきた祠が祀られている。この水は、かつて飲料水としてこの付近の人々に利用されてきたものである。また、ここからわき出た水は、近在の水田のかんがい用水としての機能も果たしていたという。

入間市鍵山、狭山市鶴ノ木(図版2-1)の2つの浄水場には、水神碑が祀られている。きれいな水の安定供給を願ってのものといえよう。

この内容の水神は、今回上流部では調査できなかった。今後明らかにしていかななくてはならない。

## (3) 漁師が信仰する水神

狭山市上奥富にある天理教分教会の斜め前の土手上に、明治14年(1881)に祀られた水神碑がある。これは入間川の漁業関係者によって建てられたもので、水難からのがれ、かつ豊漁を祈願するために設けられたものではないかといわれている。

碑や祠があるわけではないが、川越市菅間の入間川の堰で、昭和57年(1982)に水神講が催された。これは埼玉県南部漁業協同組合の主催によるもので、豊漁を祈願し、漁業の安全を祈って例年行われてきたものである。現在は「水神祭」とはいうものの、水神に係わる行事はほとんど姿を消し、漁協の役員、それに農業用水の管理者等総勢約30名参加し、酒宴が催された。

## (4) 水害よけ・水難よけとして祀られた水神

今回の調査データを概観すると、飯能から下流には、かつて大水が出た折に破堤したり、危険な状況に陥ったため、二度と水害が起きぬよう水神を祀った例が少なくない。それらが建てられた年

代を見ると、狭山市下奥富の九頭龍大権現碑（図版2-2）のように、近世に祀られたものもあるが、明治43年の大水にまつわる水神が少なくない。そこでまず、明治43年の大水に着目し、水神との係わりを見てゆくことにする。

明治43年は、埼玉県は全県的に「神武以来」といわれる大洪水に見舞われた。この年は春から長雨傾向が続き、7月が終わろうとしてもいっこうに梅雨明けの気配がなかった。それどころか8月に入ると、いっそう雨が強まり、6日からは連日連夜の豪雨となった。『明治四十三年埼玉県水害誌』は、当時の狭山市とその近郊の状況を次のように伝えている。

#### 一 入間川筋入間郡奥富村、日東村入會

本箇所の堤堰切所たるや百十間にして初め水勢激突護岸工を破壊し堤脚は益々浸蝕せられ危険なるに依り地元人民等を督励し大なる枝葉付の樹木を伐採運搬し掛け木と為し晝夜防禦に従事すると雖も缺崩箇所水深三間餘あり地盤は砂礫にして益々蠶蝕せられ地盤を押切り遂に堤防の決潰を招くに至れり而して切所よりは入間川全部の水流侵入し為めに本川の砂礫堆積丘となり僅か一葦の支流を存するのみ抑本箇所は入間郡咽喉の地に當り奥富、日東、大田、田面澤、川越町一部を浸れし夫より入間郡北東部一圓に氾濫し其水勢猛烈稀有の慘状を見るに至れり……

このように、いまだかつてないような洪水に見舞われた様子をとらえることができるが、この時、入間川町（現狭山市入間川）では、危く堤防が欠壊しそうになった。そこで、K酒店で空俵を提供、それに土砂を詰めて何俵も堤へ積み上げ、難をのがれたという。そのため、そこへ水神（図版2-3）を祀り、再びこのような災害が起きぬよう祈願したのである。

また、狭山市柏原新田に祀られている九頭龍大権現は、ここに住む9軒で祀る水神である。その由来は、明治（43年か？）の大水の際、旧家であるM家の隣家まで水害が及んだ。M家でも家族2人安比奈新田の方まで流されたが、辛くも難をのがれた。そこで、信州の戸隠神社からお札を受けここへ水神を祀ったといわれる。例年5月初旬にお日待が行われ、この土地の全戸が集まり、飲食をし、水害に遭わないよう祈るのである。

川越市小ヶ谷の稲荷神社境内へ祀られている九頭龍神は、かつて入間川の土手の中腹に祀られていた。それが土手普請に伴い、現在地へ移設されたものであるが、これも水害に遭遇しないように祀られたものであると伝えられている。その対岸、川越市鯨井の旧鯨井の渡しに祀られていた金刀比羅宮は、前述のように、明治43年の大水で流失した（その後見つかる）。その付近の様子は次のおりであった。

8月に入り降り続いた雨はいっこうに納まらず、8月7日から消防団・青年団等を中心に総出で水防に取り組んだ。空俵を集めては土のうを作り、堤防へ積み上げたが、その甲斐もなく、8日には入間川へ注ぐ小畔川の形がわからなくなるほど増水、そして10日には入間川の水防も限界に達し、作業に当たっていた人は増水のため各家へ帰れず常楽寺へ避難した。全員の避難が終わるか終わらないかのうちに、ゴオーッという不気味な音を立てて堤防が決壊、その途端、水が大波となり上戸の水田へ押し寄せて来たという。あまりのすごさに常楽寺へ命からがら逃げた来た人々は恐ろしさと落胆で力が抜けたという（『川越市歴史散歩』）。

同じ頃、入間・越辺・小畔の三川が合流する落合橋の辺りもさんたんたる有様で、住民を舟で救助にあたったが、間に合わず死者が出た家もあった。明治42年に完成した落合橋は、8月13日には水がつきそうな状態で、夕方にはらんかんの上を水が流れ始めた。この付近は一面の海となり、気の遠くなる状況であったという。

落合橋の少し上流、川島町下伊草の越辺川の堤内には二基の九頭龍大権現が建っている。銘文を見ると、いずれも明治43年における破堤地点を示したものであることがわかる。明治43年8月1日から11日までの伊草地区における被害状況は、「被害560戸、田畑422町6反、堤防決壊4件、堤防破壊7件」となっている。これら破堤地点に祀られた水神は、再度惨状が起こらないように祈願するものであると共に、そこがいざという時の危険区域であることを示す役割を果たしているともいえるだろう。

明治43年の大水については上に示したとおりである。このほか、狭山市柏原の水天宮碑(表16)、同市上広瀬の土手上的の水天宮祠(表14)、そして笹井の堰のところへ祀られている水天宮祠(表13)は、いずれも大雨の折に入間川が増水し、被害を及ぼしたため、堤防を築き、洪水から守ってもらうように祀られた水神であると伝えられている。

川越市三光町の妙昌寺境内に祀られている弁財天は、「経ヶ島弁財天」という。この近くを赤間川(新河岸川)が流れ、すぐそばには入間川も流れていた。入間川は、たいへん荒れる川で、少し雨が降るとたちまち氾濫し、赤間川の水といっしょになった。そのため、田畑はもとより民家まで水につかることが少なくなかった。水が引いた後も沼地のままで、農耕ができず、人々は大変困っていた。そこで、いろいろと思案したところ、妙昌寺の境内に塚をつくり、その上へお堂を建てて、弁財天を祀った。お堂のまわりに池をつくったので、ちょうど島のようになり、ここを「経ヶ島弁財天」と呼ぶようになったという。

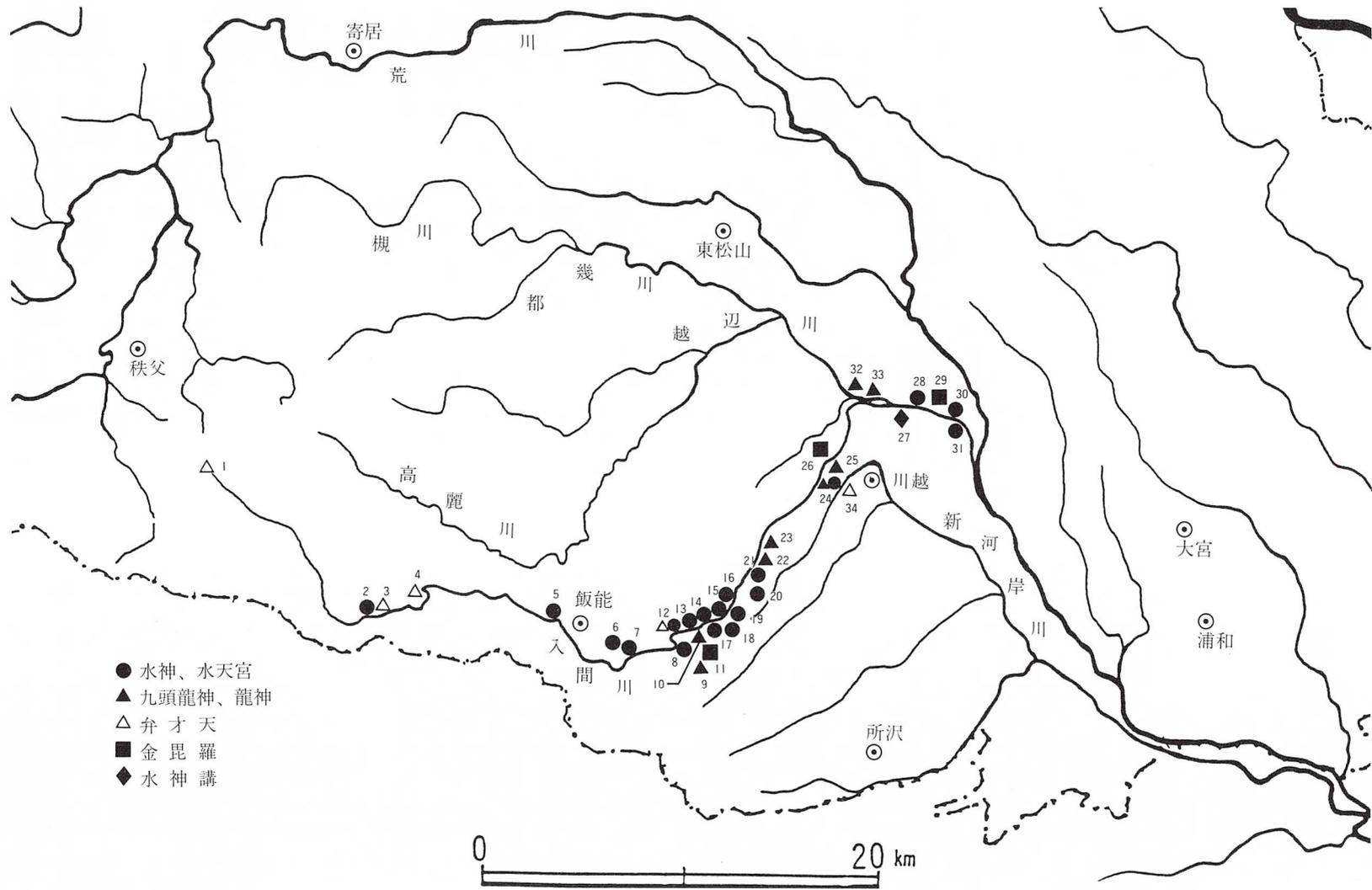
弁財天を祀るようになってからは、水の被害も少なくなり、田畑もうるおったので、人々は安心して暮らすことができたと伝えられている。これも弁天様のおかげということで評判になり、霊験あらたかな水神として、今もたくさんの参詣人でにぎわっている。

次に、水難に遭わないように祀ったとされる水神についてふれてみよう。

入間市野田の中橋は、かつては中の渡しと呼ばれる渡河点であった。ここの左岸の崖の上へ祀られている水天宮祠(図版1-5)は、渡りで水難に遭遇しないようにと祀られたものである。

狭山市笹井、通称「竹が淵」の段丘上に、辨才天・水神宮碑があり、ここは木造の祠がある(図版1-6)。この水神は一度他所へ移設したといわれているが、その後竹が淵で水難が相次いだため、またもとの位置へもどしたという。

以上述べた事例のほか、安産祈願のために水神を拝む事例も見られるが、これについては39頁の表へ示した。



- 水神、水天宮
- ▲ 九頭龍神、龍神
- △ 弁才天
- 金毘羅
- ◆ 水神講

入間川の主な水神の分布



## Ⅳ おわりに

入間川の水神を4つのタイプに分けて見てきた。この分類はあくまで便宜的なものであり、この川に適した分け方であるか判断するのは一考を要する。

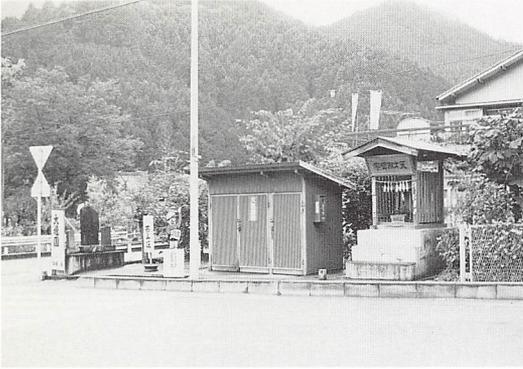
さて、入間川の水神の分布を見ると、上流から飯能までは主として筏乗りにかかわるもの、飯能を過ぎ、台地から低地へ入ると、水害から守ってもらうために祀った水神が多く目につく。洪水よけとして祀られた水神は、破堤地点か危険にさらされた場所へ祀られ、堤防の守護神として機能している。そればかりでなく、そこが災害時における危険箇所であることを示すものであり、人々の知恵がうかがわれる。渡船場の安全を祈るために祀られた水神も数例見られるが、新河岸川のような船乗りの大杉信仰は今回出て来なかった。このことは、新河岸川と入間川の水運の機能のちがいを象徴していると考えられることもできよう。入間川筋の地域には、たとえば狭山市に見られるごとく、「河岸街道」と呼ばれる道がある。これは新河岸へ通ずる道をさすもので、この地域の交易は、新河岸まで陸路をとっていたのである。水運のさかんな時代は、新河岸川を幹線とするならば、入間川は地方交通であったといえようが、こうした川のあり方が水神信仰の特色にもそのまま反映されているといっても過言ではない。

小稿は、いわば中間報告的な段階で、入間川の水神について論ずるには、さらに調査が必要なことを痛感する。今後、他の河川ともども調査を重ね、水神信仰のアプローチを深めたいと思う。

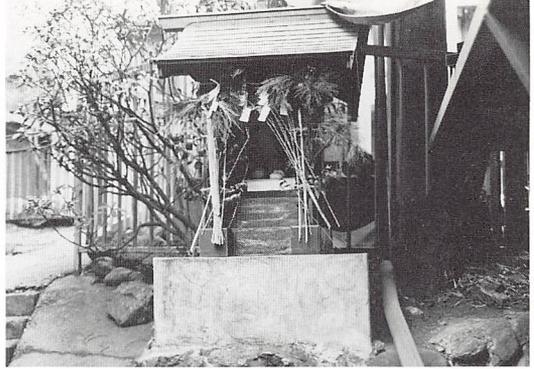
終わりに、小稿作成に当たり、下記の参考文献のほか、昭和62年度「歴史の道」調査資料をも参考にさせていただいた。記して謝意を表する次第である。

## 参考文献

- 『荒川 人文Ⅲ 一荒川総合調査報告書4一』 1988 埼玉県  
『新河岸川の水運』（歴史の道調査報告書第八集） 1987 埼玉県教育委員会  
『入間川の水運』（歴史の道調査報告書第九集） 1988 埼玉県教育委員会  
『埼玉縣市町村誌 第八巻』 1976 埼玉県教育委員会  
『埼玉県立図書館復刻叢書(+) 明治四十三年埼玉県水害誌』 1987 埼玉県立図書館  
『町の今昔物語第1集 ふるさと川島』 1980 川島町中央公民館  
新井 博『川越の歴史散歩 霞ヶ関・名細編』 1982 川越郷土史刊行会  
『狭山市史 民俗編』 1984 狭山市  
『続川越の伝説』 1982 川越市教育委員会  
宮村 忠『水害 治水と水防の知恵』 1985 中央公論社



1 弁財天祠(名栗村上名栗)



2 水天宮祠(飯能市赤沢)



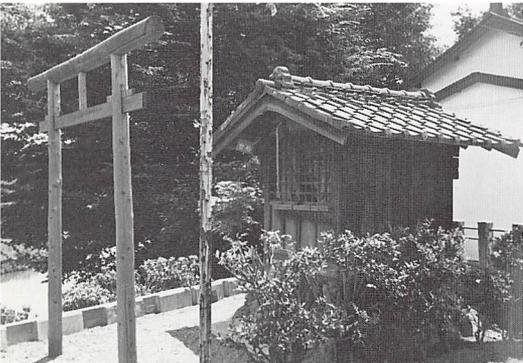
3 弁天祠(飯能市赤沢)



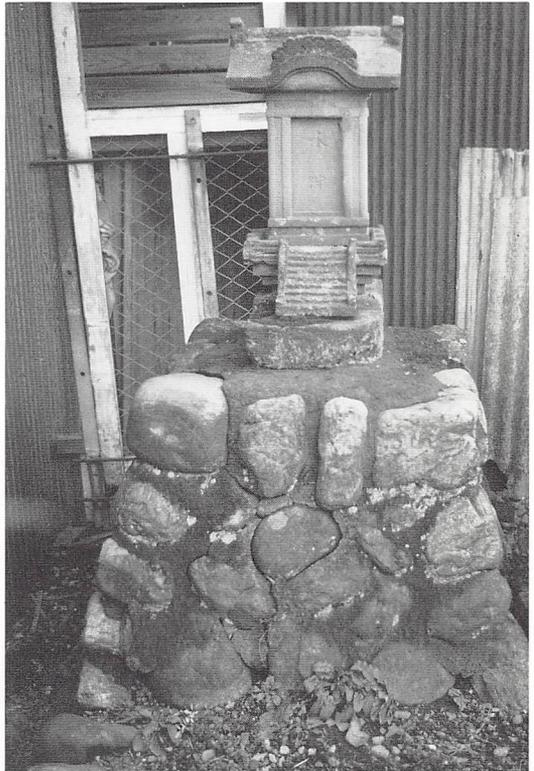
4 水天宮祠(飯能市飯能)



5 水天宮祠(入間市野田)



6 辨才天・水神宮祠(狭山市笹井)



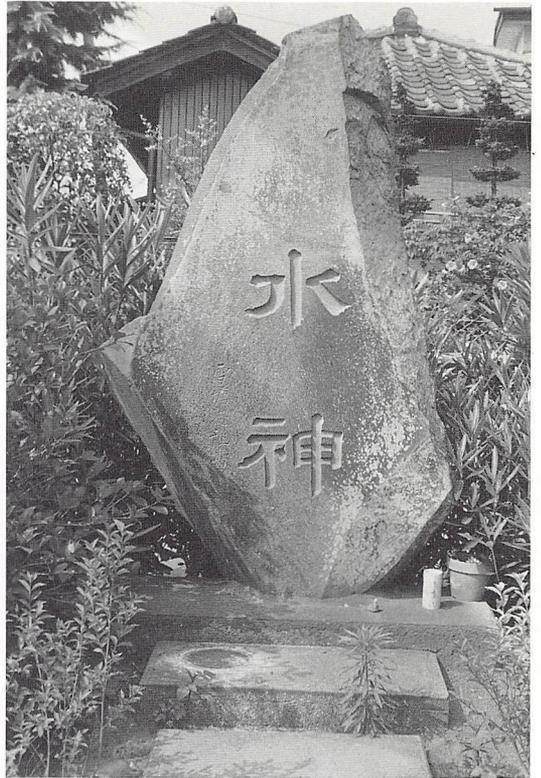
7 水神祠(狭山市上広瀬)



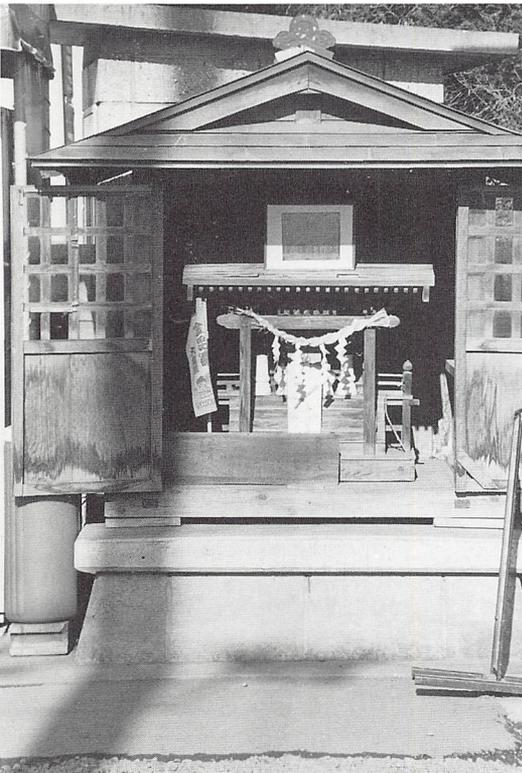
1 水神碑(狭山市鶴ノ木, 浄水場)



2 九頭龍大権現碑(狭山市下奥富)



3 水神碑(狭山市入間川)



4 金刀比羅大権現(川越市鯨井)



5 水天宮碑(川島町下大屋敷)



6 金毘羅宮(川島町出丸中郷)

# 調査研究報告 第1号

昭和63年3月20日印刷

昭和63年3月25日発行

編集・発行 埼玉県立さきたま資料館

〒361 行田市埼玉4834

印刷 (株) 秀飯舎

〒331 大宮市飯田70